

12 小 国 535  
二 葉

教育部  
資料室  
文部省検定済教科書  
新教育実践研究所編

# 国語の本

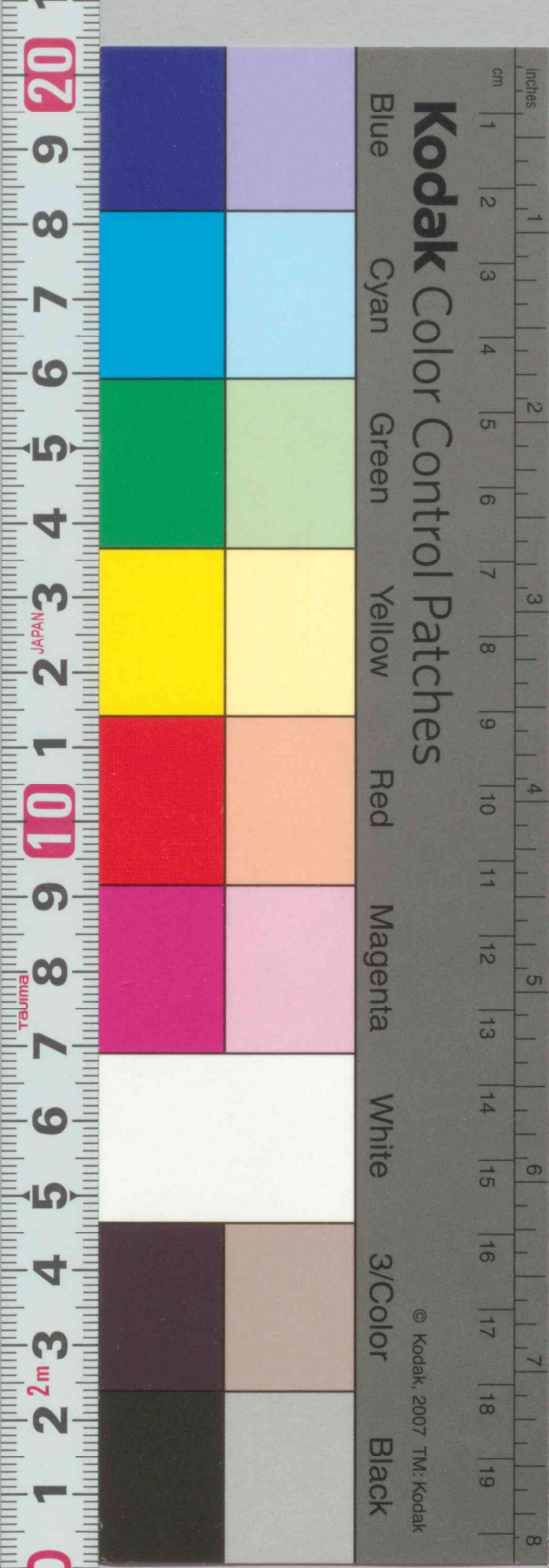


小KC  
F97

10

五年 下

教  
34  
013



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

60140

教科書文庫

6
810
34-1950
01304 49929



贈 寄

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449929

昭和二十五年 月 日  
文部省 検定 済

小学校国語科用

国語の本 十

第五学年 下

広島大学図書  
0130449929



広島大学  
教育学部図書



中央図書館

広島大学図書  
0130449929





もくろく

一 楽しい運動

(一) 私の運動日記.....

4

(二) 運動会.....

14

二 平和と文化

(一) おじさんから.....

29

(二) 幸福の国の青い鳥.....

36

三 ことばの愛

(一) ことばの愛.....

50

(二) 文字の話.....

52

四 工夫の楽しみ

(一) こわれたポータブル.....

64

(二) スイスのとけい.....

79

五 冬の生活

(一) スキーの話.....

97

(二) 雪のえい画.....

103

六 デンマークの二本の柱

112

学習の手引.....	145
新しく出たおもなことば.....	153
新しく出た漢字.....	159



一 楽しい運動

(一) 私の運動日記

十月四日(水) 晴

からりと晴れたよい天気だ。勉強が終ると、私たちはいつものように運動場へとび出した。もう、ほかの組の人たちも元気よく遊んでいる。

「何をしましょうか。」

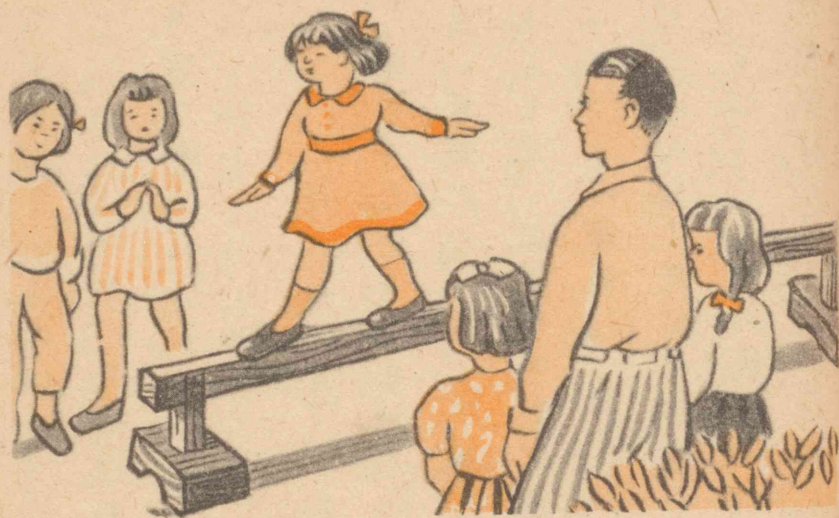
「そうね、やっぱりおにごっ

こをしましょうよ。」

私たちの相談はすぐまとまる。おにごっこも、にげ方や追っかけ方を考えてすると、なかなかおもしろい。

にげる時は、みんなおたがいに守りあうようにかたまっていて、おにがやってきたらひとりひとりわかれて、おにの気をそらすように四方八方へ散って行く。おにがひとりを追っかけはじめると、また





「それ、私たちにかしてください。  
あとでしまっておきますから。」  
と、たのんでかしてもらった。  
ほかの組の人たちの運動のじやま  
にならないように、平きん台をこう  
どうの横へ運んで行って、みんなで  
わたり方を練習した。  
前向きにわたったり、横向きにわ  
たったりした。なかなかうまくいか  
ないで、何べんもちゅうで落ちた。  
いつの間にか、先生もそばへきて見  
ていらっしやったが、

みんなその近くへ集まり、おにの気持を自分の方へ引きつけて  
おいては、ぱつとにげだす。  
おにになった時は、みんなに気づかれないようにして、  
ひとりからねらったら、わき目もふらずひた向きに追っかけて行  
く。こんなふうを考えてやった。  
きょうは、にげた時も、おにになった時も、自分の思いどお  
りになって、とてもゆ快だった。

十月五日（木）晴

きょうもよい天気である。  
運動場へ出ると、ちやうど体そうを終わった六年生たちが、平  
きん台をしまうところだった。

「先生もなかまにはいって、やってみようか。」とおっしゃった。先生はわたり方がとてもうまい。あとでわたり方を教えてくださった。みんないっしょうけんめい練習した。

十月六日（金） くもり後晴

朝のうち少しくもっていたが、午後からはきのうにまけないよい天気になった。午後は、私たちの組の体そうである。したくをして、みんな元気に運動場へ出た。

「きょうの運動は、ドッジボールにしてください。」と、みんなで先生にお願いした。

「では、この前の続きをやりましょう。」

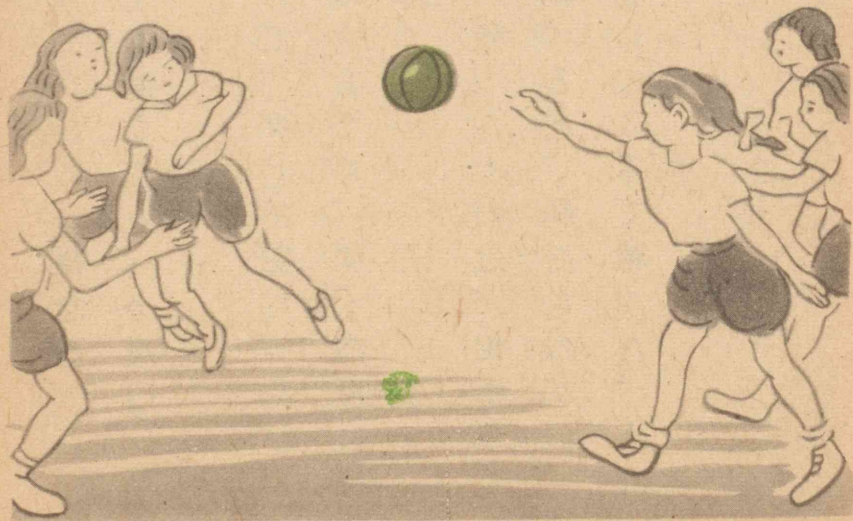
先生は、にこにこしながらおっしゃった。

この前は三回やって、私たちが二回負けている。きょうは、ぜひ勝ちたいものだ。

私は、最初内野になって、相手にどんどんあてていった。

「止め。」のあいずで人数を数えたら、私たちがの方が七人も多くて大勝ちだった。

二回目も私は内野になったが、この時は相手方がはげしくあててきて、私たちがの方が四人の差で負けた。私は一回



目と同じように、最後まで内野に残っていたのに残念だった。  
いよいよ三回目になった。どうしても勝ちたい。今度は、外野にまわった。

外野は、私はあまり得意ではないので、少し不安だったが、きょうはうまく相手のひとりにボールをあてて、すぐ内野にはいった。それからもうむちゆうだった。

「止め」のあいずのあった時、内野に残ったものは、相手方とほとんど同数ぐらいたった。人数を調べると、私たちがの方が、八人で、相手方が七人だった。きわどいところで勝った。うれしくてたまらない。

十月七日（土） 晴

勉強がすんだ。

鉄ぼうの方へかけて行く。

鉄ぼうにつかまって

くるくるまわる。

ぐるっとまわって、さかさになつて、

下から見ると、きれいなけしきだ。

上へあがって、せぼねをのばすと、

ぽっかりうかりうかんだ白い雲へ、

びよんと、とびつけそうだ。



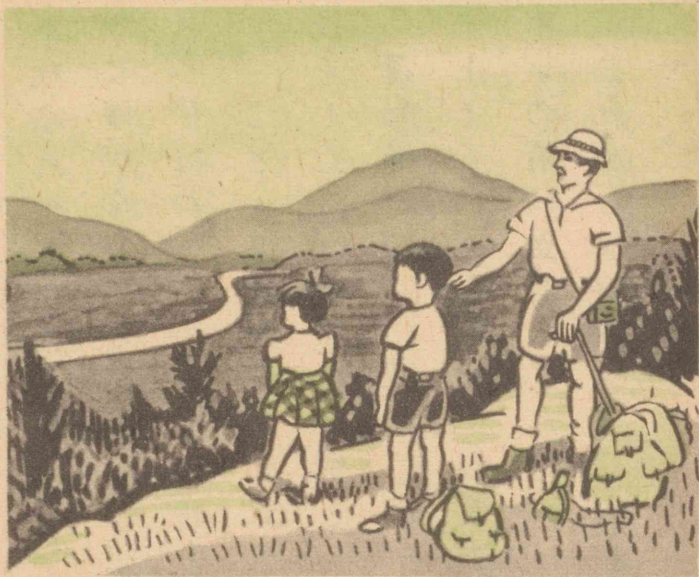
十月八日（日） 晴

おとうさんと弟と三人で、たき山へのぼることになった。

朝早く起きた。あつらえむきの上天気だ。おかあさんのつくってくださったおべんとうやおやつをリュックにつめて、三人で元気よく出かけた。

一時間ばかり朝の道を歩いて、たき山のふもとについた。たき山は高さ六百メートル、このあたりで一番美しい山だ。しばらく休んでのぼりはじめた。少しのぼると、しだいに道がけわしくなってくる。足もどがあぶない。半分以上のぼった所で、どうどう弟が弱ってしまった。私も息切れがしてきた。三人、岩にこしをかけて休んだ。風がひやりとせなかに流れこむ。

大分長く休んでから、またのぼりはじめた。おとうさんは弟のリュックを持ってやっていらっしゃる。「よいしょ。よいしょ。」とかけ声をかけてのぼって行った。ようやくちよう上へついた。



家に帰りついたのは、午後三時過ぎだった。

とてもいいけしきだ。私たちの学校が、明かるい秋の日ざしをうけて小さく見える。川も細くおびのように流れている。ちよう上の見はらし台にこしかけて、おべんとうやおやつを食べた。食事がすむと、急に元気をとりもどして、私は弟とつかれをわすれて遊んだ。帰りはのぼる時とははんたいに、すべるように早くおりた。



(二) 運動会

秋晴れのよい天気です。ちり一つない運動場に、白線がくつきりと浮かんで見えます。はちまきをした一年生が「きゃっ、きゃっ」とどびはねています。見物席は、もう半分以上もつまっています。ことしの運動会は、五六年生が協力して、プログラムの相談をしたり、会場の準備をしたりしました。

運動場一ぱいに流れていたにぎやかなレコード音楽がぴたりと止まると、白シャツ白ズボンの高木先生が、本部のマイクrohンの前に立ちました。

「これから運動会をはじめます。みんな前の庭に集合してください。」

高木先生の元気な声が、二階のまどぎわのスピーカーからひびいてきました。みんなはわあっと歓声をあげて、前庭の方へかけ出しました。どの顔もどの顔も明かるく健康そうです。六年生のかかりの号令できちんとならびました。

行進のレコードに合わせて入場しました。何だかからだ中がむずむずしてきて、ひとりでに足が浮きたちます。

「きょうの運動会は、この晴れわたった秋空のようにすっきりした気持ちで、楽しく、元気いっぱいにかんばりましょう。」

校長先生のお話のあとは合同体そうです。それが終わってから、赤白に分かれてひかえ席にかえりました。

いよいよえんぎがはじまります。進行がかりがプログラムの順によび出します。おうえんの声が、しばらくはにぎやかに聞

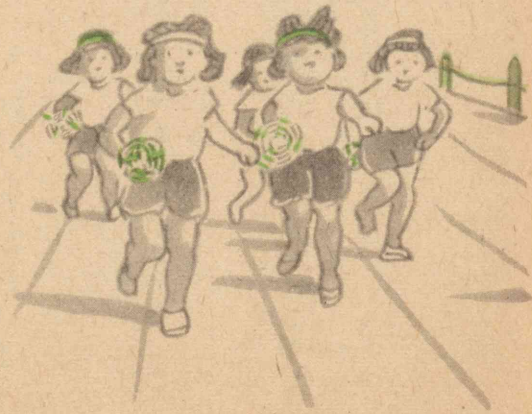
えています。道具がかりの子たちが、いそがしそうにかけて行きます。

第一回は三年生の徒競走です。赤白に分かれて六列にならんだ三年生が、スタートラインの所へ向かいました。ひかえ席からは、一せいにはく手がおこりました。中山先生のピストルのあいずで、ひと組ずつかけ出します。赤白のぼうしが入りみだれて、運動場をまわります。齒をくいしばって走る子、両手をくるくるまわして走る子、ころげても元気にはね起きて走り続ける子。おうえんの声が走る子を追っかけてまわります。

第二回の二年生の「風車競走」は、

ただ風車を持って走るだけですが、赤・白・青・黄の風車が、すごい勢でまわりながらぬいたりぬかれたりするのはおもしろいと思えました。

ゆやかな四年生の「大玉ころがし」、おかしい三年生の「はとぽっぽ競走」がすんで、いよいよかわいい一年生の「玉入れ」です。見物人が一せいにはく手をおくりました。みんな手に手に玉をにぎって、にこにごと行進します。赤白に分かれて位置につきました。長いさおの先のかごが、青空に向かって大きな口をあけています。「さあさあ、しっかり投げるんだよ。」



かごが一年生によびかけているようでした。  
いよいよ玉入れがはじまりました。かごのふちに当たって、お  
しいところで落ちる玉、底にぶつかって、はね返る玉、かごを  
乗りこえて、向こうへとぶ玉。まるで赤白の玉のふん水です。  
見事な花火のようです。あとからあとからふきあがります。ぱっ  
ぱつととび散り、はね返ります。

一年生は、もうむちゅうです。赤白の区別などわすれてしまっ  
たようです。手当り次第に投げています。

ピストルが鳴りました。両軍は、もとの位置に引きあげまし  
た。一点の差で赤が勝ちました。赤は得意そうにばんざいをさ  
げびました。

こうして、えんぎはだんだんおもしろくなっていきました。



いつの間にか見物席はぎっしりつまって、後の方に立ってい  
る人さえありました。

午前の番組の最後は、四年生  
以上の女生徒のダンスでした。  
両手に赤と青のリボンをひらひ  
らさせて、ちょうちよのように  
おどりました。二重の円をつく  
っておどっている様子は、絵日  
がさのようにきれいでした。  
ここから見てもあんなにきれい  
なのだから、二階のまどから見  
おろしたら、きつとすばらしい

だらうと思いました。

昼食の時間になりました。みんな教室にはいって楽しくいただきました。給食の方からは、おいしい副食物がたくさん出ました。昼の休みには、PTAの売店がたいへんにぎわいました。午後のプログラムは、えんぎをする方も見物をする方も、カゴぶのはいるものがずらりとならんでいます。ひかえ席からのおうえんの声も急に興奮しはじめました。次ぎ次ぎと進んで、第二十五回の「たわら運び」の番がやってきました。五年生のおうえんぎです。進行がかりのよび出しを聞いてから、ぼうしをかぶりなおして前庭に集合しました。みんなは、足をもんだり、両手をふりまわしたりして、準備運動をはじめました。

「みんな、しっかりがんばろうね。」

「よしきた。きまりよく、元

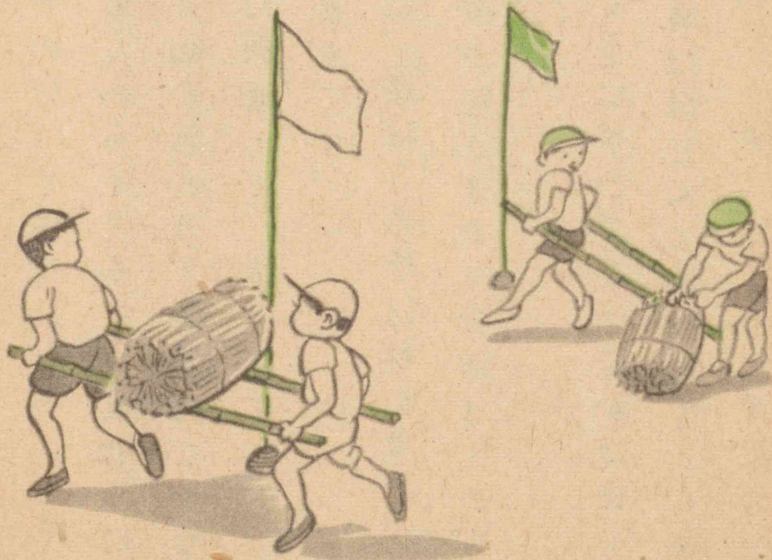
気にやろうよ、ね。」

そんなことをいって、たがいにはげましあいました。

「赤勝て。」

「白勝て。」

と、かわるがわるよびあうおうえんの声の中を、かけ足で位置につきました。ピストルのあいずでかけ出しました。まるまるどふくれあがったわらを、二本の竹のぼうしにの



せて走るのにはなかなかの苦心がいらいます。とんとんとかける足のしん動で、たわらの向きが竹のぼうと平行になったりします。すどんと落ちてころげまわるたわらを見ると、見物人はわあっと歓声をあげます。ぬいたりぬかれたりで勝負はなかなかつきません。見物人はそのたびに興奮して、赤よ白よのおうえんの声が、運動場にあふれるばかりです。

いよいよ私たちの番がきました。後ぼうの子は秋山君です。せいが小さいので心配です。白が少しおくれつつきました。「たわらをしっかりと見ていてね。」

早口に秋山君にいつて、竹ぼうをにぎってさっとかけ出しました。おり返しの白旗をまわる時はほとんど同時でした。赤のたわらが落ちました。今のうちだ、と思つてぐつと足に力を入

れました。そのひょうしに、竹ぼうをにぎっている手が軽くなりました。三メートルほど走つてふりむくと、秋山君がたわらをかかえてまっかな顔をしています。白のひかえ席は総立ちのおうえんです。

この「たわら運び」は、ついに勝ち負けなしの熱戦ぶりでした。第二十八回、PTAの「かりもの競走」がはじまります。スピーカーが父兄の見物席によびかけて有志をつのっています。この競走は、どちゆうにばらまいてある紙きれを拾つて、そこに書いてあるものを見物席からかりて走るのです。スタートラインの所には、有志の人々が続々と集まってきました。先生がたもまじっています。

最初の組がかけ出しました。あまり勢よく走りすぎたので、



紙きれの置いてある所をどびこしてしまったおじさんがあります。みんな走りながら読んでいます。書いてあることがわかれると、急にあたりをきよろきよろさがしはじめます。「来年一年生にあがる女の子をかしてくださあい。」

野球ぼうをかぶったおじさんが、紙きれをひらひらさせながら見物席によびかけています。見物席から、どこかの

おかあさんが女の子を連れてかけ出しました。野球ぼうのおじさんは、

「すみません、お願いします。」

とさけんで、その女の子を大事そうにだきあげて走り出しました。にぎやかなはく手がおこりました。一年生を三人連れて走る先生、ハンドバックをうでにさげてかけるおじさん、かりる人もかす人も、みんなにこにこ顔です。P・T・Aの「かりもの競走」は、おかしくて、おかしくて、わらい声がいっまでも止みませんでした。

いよいよ最後の番組になりました。スピーカーから、全校こう白リレーの選手のよび出しが場内にひびきわたりました。その時とつぜん、赤のひかえ席の方からわあっという歓声があが

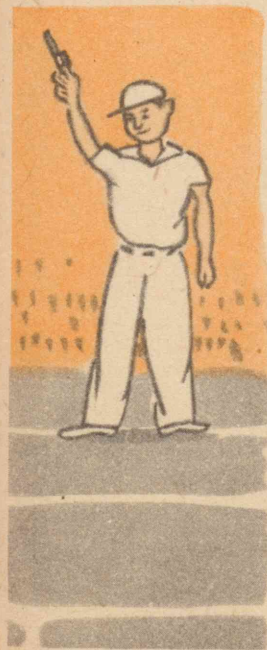
りました。するとそれにこたえるように、白のひかえ席からもあらしのような歓声がおこりました。

「フレール、フレール、赤」

「フレール、フレール、白」

場内は、完全に興奮のるつぼにとけてしまいました。その中を、二列にならんだ学年代表選手が、足どりも軽くスタートラインに向かっていきます。赤白のはちまきをきりつと結んでいきます。やがて、用意のできたあ

いずのふえがひびきました。小さな一年生がスタートラインにつきました。中山先生のピストルが高くあがりました。

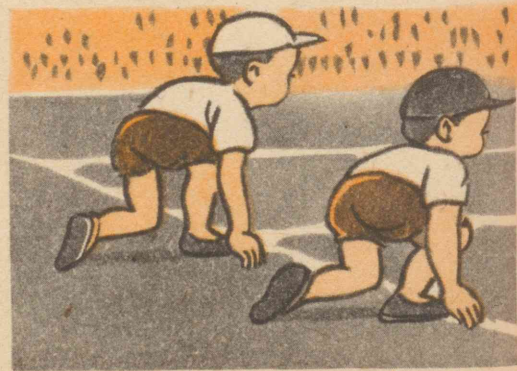


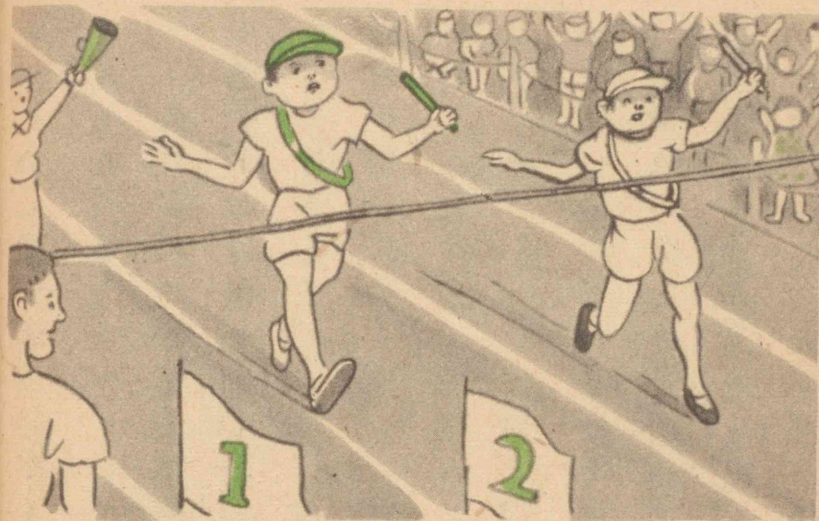
そのしゅん間、場内は水を打ったようにしんとまりました。

ふたたびばく発した歓声の中を、一年生の選手がかけ出しました。ころがるようにかけて行きます。はじめのカーブで、先頭の白が何かにつまずいてころりところびました。白はすぐはね起きて、その赤を追います。齒をくいしばって、ぐんぐん追いつめます。みんな、ひかえ席から乗り出しそうになりました。

決勝点の少し手前で、どうどう赤を追いつぬきました。バトンを二年生が受取りました。

三年、四年、五年と、追いつ追われつの大接戦で、敵味方入





りみだれてのおうえんです。父兄席まで総立ちになりました。

パン、パーン。

ピストルの音と同時に、最後の選手がほとんどかたをならべてテープを切りました。われるようなはく手が、いつまでも場内にひびいていました。

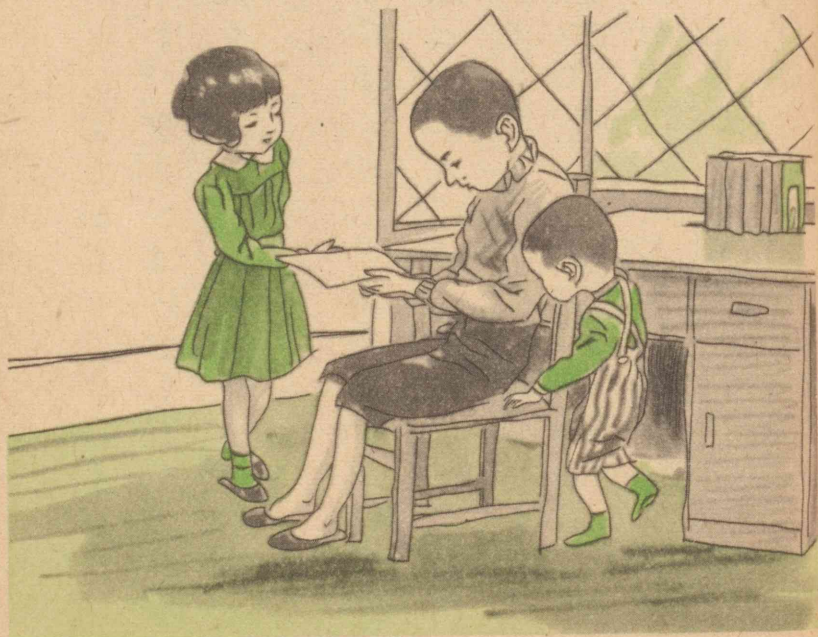
楽しみに待っていた運動会も、とうとう終わりました。すみきった秋空の下で、思いきりはねまわったあとの気持は、幸福そのものでした。

## 二 平和と文化

(一) おじさんから

あきらさん。

一週間ほどまえから東京では気持のよい秋晴れの日が続きます。みなさんお元気だそうで安心しました。ことしも、おじいさんのごじまんのきくが、庭いっぱい美しくさいていることでしよう。私もおか





げさまでびんぴんしています。

「家庭新聞」を送ってくださって、ありがとうございました。ほんとにすばらしいできばえです。ゆうべはおそくまで、あの新聞を読みました。そして、みなさんのことをなつかしく思いました。

ニュースは、新聞のまる写しではなくて、はっきりと要点をつかんでいます。わけても家庭ニュースのところは、ひとりひとりのようすをおもしろく書いてありますから、おもしろくなつて思わずふきだしました。ことに、研究らんにある君の「さつまいもの收かく」と、きよちゃんの「にわとり日記」は、よくできていました。気をつけて、くわしく観察したからだろうと思



います。その上、いろいろなところに数字がはつきり出ているのは、いかにも科学的で、りっぱなことだと思います。

「家庭のことば」は、新聞の社説にあたるところでしょうが、ふだんの生活をよく反省しています。きよちゃんのわらい話も、ひろしさんの絵も、おもしろくできていました。ほんとうになかよし家庭新聞ですね。なんべん読んでもあきません。

あきらさん

あすは十一月三日、「文化の日」ですね。こちらでは今、いろいろな運動競技があちこちのグラウンドで、はなばなしく行われています。また、このあいだから、講えん会や美術展らん会や

音楽会や図書祭などが、次々に開かれています。

昭和二十一年の十一月三日に公布された憲法は、君もひとりおり調べていることでしょう。前文と十一章百十三条からできている新しい憲法は、古い憲法とはすっかりちがったものです。武器をすてて、えい久に戦争をしない平和な民主主義の国をけん設することになりました。文化をたかめて、世界の国々のためになることが、ただ一つの望みになりました。人類として、これ以上の望みはありません。そこで、十一月三日を、自由と平和を愛し文化をすすめる祝日にきめました。

しかし、平和と文化ということは、なかなかたやすいことではありません。いっしょうけんめいにならなければ、世界の国に追いつくこともできません。ところが、昭和二十四年のち

ようと文化の日に、遠いスエーデンのストックホルムからうれしい知らせがとどきました。それは、何でしょう。そうです、君も知っているように、その前の年からアメリカ合しゅう国にいた湯川秀樹博士に、その年のノ



ーベル物理学賞を授けるといふ知らせがあったことですね。それは博士が昭和十年（一九三五年）に発表した湯川りゅうしつという物理学の理論にたいしてでした。

世界でいちばん名よなノーベル賞は、半世紀も前から始まっているのに、今まで日本でその賞を受けた人は、ひとりもあ

りませんでした。ノーベル賞は、物理学、化学、医学、文学、平和の五つの部門にわかれて授けられるのに、そのどの部門でも、日本は落第だったのです。世界の水じゅんからはるかに下のところにいたのです。それが時も時、ちょうど昭和二十四年の文化の日に、日本人の中から、この名よある人をだしたのです。湯川博士の研究がりっぱなものとして、世界の人々から折紙をつけられたわけです。国民はおどりあがって喜びました。そして心から湯川博士のてがらをほめました。

あきらさん

文化は尊ばなければなりません。それは人間がほんどうの人間になるといふことです。そして、人類の進歩につくすといふことです。いくら尊んでも、尊びすぎるといふことはありません。人々が湯川博士をほめるのは、もったもなことです。

今までにこのノーベル賞を受けたのは男だけではありません。キューリー夫人や、パール・バック女史のことは、いろいろな本に出ていますから、きよちゃんにもすすめて、よく読んでください。

第二第三の湯川博士は、どうしても君たち少年の中から出なければなりません。毎年の文化の日に、日本の文化を、よく反省するようにしましょうね。

今は黄ぎく白ぎくがさきにおう秋です。おたがいに元気を出しましょうね。みなさんにくれぐれもよろしくいってください。

十一月二日

おじさんから

あきらさんへ

(二) 幸福の国の青い鳥

昭和二十三年九月三日の午後一時、わたしは、きょうの会場であるK講堂にでかけていきました。これは、ヘレン・ケラーさんの講演が行われるからです。電車に乗って、H停留場で下車して、それから二百メートルばかり歩いて行きました。もうすぐK講堂です。

わたしの前をピンク色のワンピースを着て、かみには、水色の大きなリボンをひらひらさせながら、どこかの少女が通っています。その左うでをしっかりとつかかえたその父親らしい人が足を合わせるようにして、ゆっくりゆっくり歩いていました。幸福な父と子が、そろって散歩でもしているのであろうと思っ

ながら、わたしはその横を通りこしました。通りすがりにその少女が、どんなようすをしているのかしらと、ちらっとふりかえって見たのです。

ところが、その少女は、まぶたをどじたままでいました。

「あ、めくらの子なんだな。」

と、わたしはすぐ気づきました。

「なんと気のどくなかたなのだろう。」

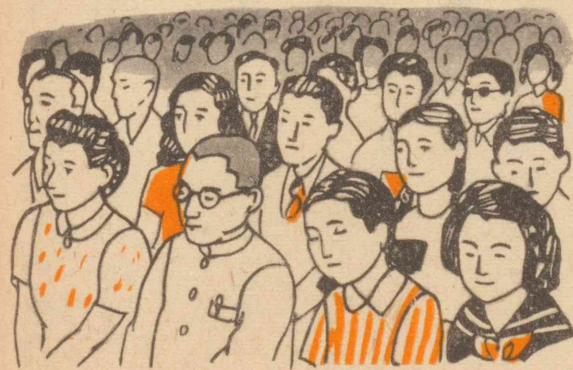
後すがたを見た時には、いかにも幸福そうに見えた人たちだけに、今、そのことを知って、いっそうかわいそうに思われました。「この人たちも、きょうのこのヘレン・ケラーさんの講演会にやってきたのかもしれない。」こ



んなことを思いながら、K講堂のげん関の石だんをのほりかけました。

右手からのぼってきた人は、もうだいぶ年をとった男の人でしたが、まっ黒な目がねをかけ、つえをついていました。

講堂内は、ほとんど満員になっていました。わたしは、一ばん上の階上へのぼりました。ろうかをいききしている人たちも、ほとんどめくらの人で、妻に手を取られて、いる夫のような人もいました。どちらも目が見えないふたりの青年が手をとりあって、早足に歩いているのもいました。



五六人の女の子、それも、やはりめくらの人たちでしたが、ひとりの女の先生に、みんなつながって入口にはいって行くところも見えました。

わたしは、すみの方にわずかあいていた席を見つけて、こしをおろしました。

きょうは朝から三十三度というきびしい残暑であったので、会場内はむせかえるほどでした。

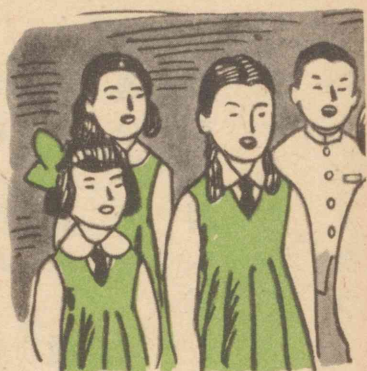
定こくが少しおくれて、まくが左右に開かれました。「ヘレン・ケラー先生をむかえる歌」を歌うめくらの学生たちが、ピアノをはさんできれいになりました。

ピアノのばんそうにつれて、静かな美しい歌が満場にひびきわたりました。もちろん、この階上のかたすみにもよく聞えま



した。耳も聞えず目も見えない人をむかえるのに、歌を歌うということは、むだなことかもしれない。ヘレン・ケラーさんには感じることでできない世界であるからです。けれども、心からおむかえする喜びを、表わさないではいられない。めくらの学生たちの気持を、わたしは尊く思いました。聞えなくてつまらないだろうと思うのは、わたしたちばかりで、ヘレン・ケラーさんは、あるいは、何か感じるのかもしれない。空気のびみょうなしん動に、こころよい音色を聞くかも知れません。聞える、聞えないの境をこえて、みんなでその人をむかえることは、なんとしてみうれしいことです。

わたしは、今から十一年前にも、やはり



ヘレン・ケラーさんをおむかえしたことがありました。その時は、こんな歓げいの歌などには気がつきませんでした。あれからきょうまで、ヘレン・ケラーさんは、ただただ世の中の不幸な人たち——めくらの人や、おしの人、つんぼの人などをはげまし、元気づけて、少しでも幸福にしようという運動をしてきたのです。

その間に世界では大きな戦争があつて、日本は、たいへんな変りかたをしてしまいました。ただ一つの道、それは、真理への道を、一步一步と、しかも堂々と進んできたただひとりの人ヘレン・ケラーさんに対して、なんとほろかしいことではあり

ませんか。目のあいた者、耳の聞える者、よくしゃべれる者が集まっていながら、この十年間に、どれだけ、人間としての美しい実を結んだことでしょうか。

わたしは、ヘレン・ケラーさんをむかえる歌を、今はじめて知ったので、いっしょに歌うことはできませんでした。けれども、耳をすまして、その歌詞を聞きました。

幸福の国の、青い鳥、

青い小鳥が 飛んできた。

遠い国から はるばると

日本の国へ、この里に、

海をわたって 飛んできた。

ヘレン・ケラーのおばさまは、



いつも小鳥と いっしょです。

「なんといい歌であろう。そのとおりだ、そのとおりだ。もう人の学生さんたち、もっと大きな声で歌ってください。」と心の中で、わたしはさけびました。

幸福の国の 青い鳥、

青い小鳥を みつけましょう。

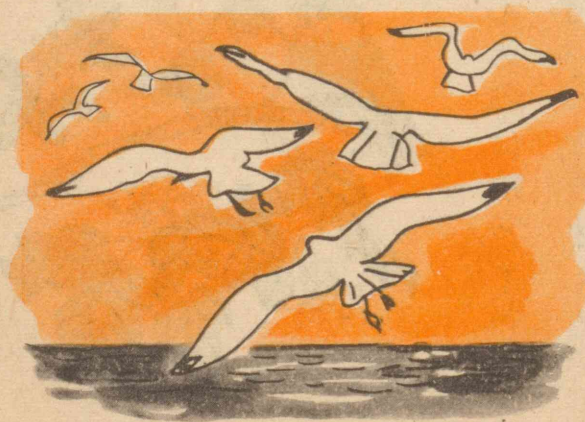
みんなそろって まどあけて、

心の中に、青空に、

かわいいつばさを みつけましょう。

ヘレン・ケラーのおばさまの、

かたへ小鳥が とまります。



幸福の国の 青い鳥、  
青い小鳥が 歌います。

つらいなみだを ふりすてて、  
明かるく強く ほがらかに、  
生きていこうと 歌います。

ヘレン・ケラーの おばさまは、  
きょうもみんなを 守ります。

目の見えない不幸な人が、いっしょうけんめいに歌っているのを聞いているうちに、わたしはむねが一ぱいになりました。歌いながらあの人たちは、どんなになくさめられているのだろうと思ったからです。

歌が終ると、まくが一度とぎされました。ぶたいには、大き



なはちに、まくが植えてありました。そのとなりには生花がたくさんかごにかざってありました。色とりどりの美しいこの草花も、お客さまには見えなくて、ちよつとさびしいなあと思いました。

まくがあくと、正面に、ヘレン・ケラーさんがこしかけていました。黒地に花もよりのついたワンピースを着、白い夏ぐつをはいていました。さもうれしそうな、明かるいわらい顔をしてい

ます。その左がわにはトムソンさんがすわっていました。そのとなりには、岩橋武夫<sup>いわはし たけお</sup>さんたちがこしかけていました。それから、一ばんはしに、十三四の少女がきちんと席についていまし



た。

「まず、東京ろうあ学校の生徒さんに、歓迎のごあいさつを  
していただきます。」

と、司会の人がいきました。すると、一ばんはしの席にいた少  
女が、つと立ちあがって演だんにのぼりました。

「ヘレン・ケラーセンセイヲ オムカエ シテ、ホントウニ  
ウレシイト オモイマス。ワタクシガ コンナニ オハナシ  
ガ デキルヨウニ ナツタノモ、ヘレン・ケラーセンセイノ  
コトヲ シツタカラデス。」

セカイジュウノ ヒトハ、ドレホド センセイニ タスケラ  
レテ イルカ ワカリマセン。」

かく声機をとおして、高低のない、強弱のない、一本調子の声

が、このように、一音一音耳に届きました。

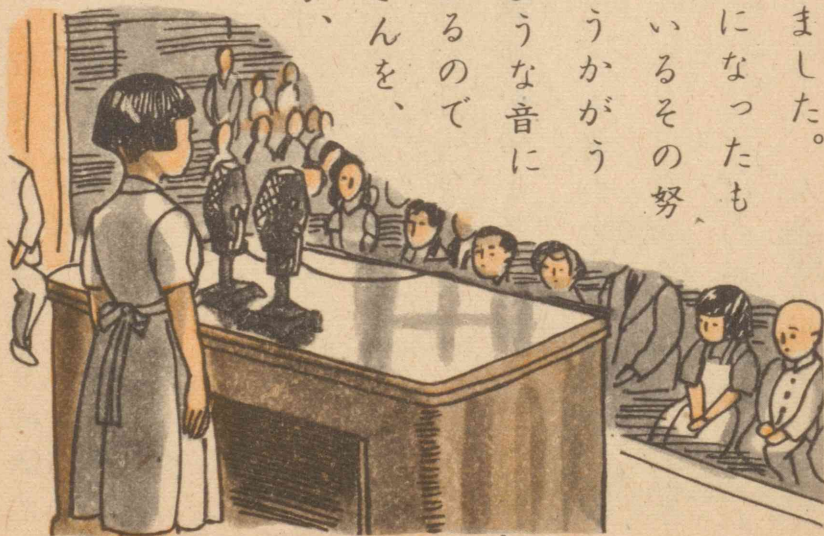
よく、これほどまでに話せるようになったも  
のだ。からだいっぱい力をこめているその努

力が、高い階上のかたすみからもうかがう  
ことができました。時にはほえるような音に

なり、時には、なくような声にもなるので  
すが、ともかく、ヘレン・ケラーさんを、

おむかえしてうれいというところが、  
満場の人々に伝えられました。

この少女のことは、岩橋さん  
の通訳によって、トムソンさんに  
伝えられ、これをトムソンさんが、



ヘレン・ケラーさんの右の手のひらに伝えるのです。その伝えかたは、五本の指でたたきながら、ヘレン・ケラーさんの手のひらに、ことばの記号として伝えるわけです。まるですばやいピアノでもひくような調子に見えます。ヘレン・ケラーさんに少女の心がじかに伝わっていくのです。ヘレン・ケラーさんは、この少女の心を読みとると、トムソンさんの右手をしっかりと両手でにぎりしめて、うれしそうに上下にふりました。

それから、ヘレン・ケラーさんの講演が始まりました。

その一言一言は、もう人たちが、ろうあ者たちの暗い心に、火を点じるようなものでした。まっくらなほらあなに、明かるい光がさしこむ。それは、かがやかしいことばの光です。

「目が見えなくても、耳が聞こえなくても、人と同じ感情をも

っています。同じ願いをもっています。」

人として、もう人もろうあ者も、みんな

同じなのだ。働きたいと思っっているのだ。

差別なしに取りあつかってほしいと願っ

ているのだ。低い声ではあるが、その中には

真理がいつぱいこもっていました。その一言一言にはく手がおくられるのももつともだと思いました。写真はんのフラッシュと、えい画さつえいの光線を浴びて、ヘレン・ケラーさんはどんなに暑いでしょう。けれども、少しも苦しそうな顔をしないで、おだやかに話を進められました。

これこそ、「幸福の国の青い鳥」だと、わたしはしみじみ感じました。



### 三 ことばの愛

#### (一) ことばの愛

「とうさん。」

と、たろうがそばへきて、外国ではどんなことばを話すか、たずねるものですから、そりゃあフランスではフランス語さ、イギリスへ行けば英語を話すように、と、とうさんがいつて聞かせました。

「子どもでも？」

と、またたろうがたずねました。

たろうよ。フランスでは、おさかな屋



さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。えん筆一本買いに行くにも、日本のことばではつうじません。「今日は」なんていったってだれもわかるものがないりません。

そういう遠い国へ行くと、自分の国のことばがいしくなります。こうしておまえたちに話すような国のことばが思うさま使ってみたくくなります。国のことばで書いた本が読みたくくなります。とうさんは外国に暮らして、つくづく日本のことばのありがたさを知りました。

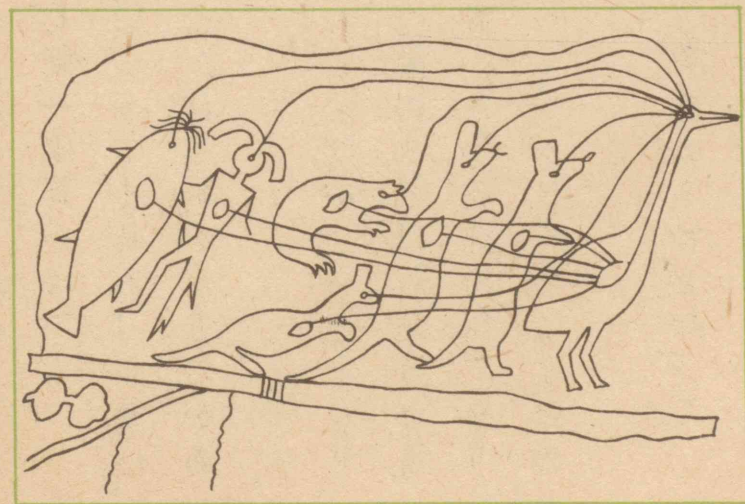
おまえたちはおさな心にも、ことばを愛することを知って、そして勉強したら、どんなにしあわせだろう。

(二) 文字の話

一 文字の始まり

このへんな絵はなんでしょうか。  
何かあてもものようですね。これは  
むかし、文字を知らないアメリカン  
インディアンが、アメリカの議会へ  
差し出したお願いの文です。

むかし、シユーペリア湖の近くに  
ある小さな湖で、インディアンが漁  
業をする権利を得させてもらいた  
いというので、八つの村が合同してた



のんでいるのです。それぞれの動物はタブーと  
いわす印です。先頭のツルは代表村のタブーで、  
二番三番四番の村はテン、五番の村はカモシカの子、  
六番の村は人魚、最後のはナマズです。

みんなの目から出た線がツルの目に結ばれ、  
みんなの心ぞうから出た線がツルの心ぞうにつな  
がっているのは、みんな「注目」と「決心」と  
がツルによって代表されているということな  
のです。しかも、ツルの目からは別の線が  
出て、一つは湖へ一つは議会へつな  
がっております。

このような簡単なものでも、人間の考  
えや感じがよく現われておれば、文字  
にかわるはたらしきをします。イン  
ディアンでも、今ではこんなものは  
使いませんが、大むかしには世界の所

所に絵文字といたうのがありました。

絵文字は、この絵のように話のすじを主にしたものです。それがあつた時代を經ると、一つ一つのことばを現わす文字に進みました。たとえば、「山」とか「水」とかいう漢字がそれです。

その次ぎは、ことばを組み立ててゐる音に分けてあらわす文字ができました。まへの例でいへば「ヤ」と「マ」「ミ」と「ズ」

○ 日  
○ 月  
雨 雨

といふ仮名文字です。音をもう一度くだいてあらわせるのがローマ字であることは、みなさんもごぞんじです。ね。「ヤ」は y と a、「マ」は m と a、「ミ」は m と i、「ズ」は z と u に分けられます。

これから文字のできかたについてお話を

いたしましょう。

## 2 漢字はどうしてできたか

いまでは漢字は五万以上もあるといわれ  
ておりますが、できかたの主なもの次ぎ  
の三種です。

その第一は、絵がそのまま字になる方法  
です。

「日」「月」「雨」「山」「川」「木」「竹」「馬」「鳥」  
「犬」「子」などはみな、はじめはかん  
単な線画でした。それがだんだん線を少くし、  
また引きかたを一定していつて、ついに字

山 山  
川 川  
木 木  
竹 竹  
手 手  
馬 馬  
鳥 鳥  
大 大  
子 子

となったのです。絵が字になるとは遊ぎのようにおもしろいではありませんか。

第二は絵の上へ、さらに別の意味を加えて進んでいく方法です。たとえば、日と月と二つそろえばあかるいので「明かり」となり、木と木とがなれば「林」となり、木がかさなりあえば「森」となります。また、日が少しのぼって木にかかった方を「東」で表わし、木の根もとに印をつけて、ここだと教えたのが「本」(もと)で、木のえだの下の方に印をつけて、ここだと示したのが「末」(すえ)です。

そのほか、「田」で働く「力」が「男」であり、「心」を「亡くす」と「忘れる」になり、「山」の「風」が「嵐」になり、「少ない」「力」が「劣る」になり、「小さい隻」は「雀」となります。考えてみると、この種

類はまだまだあって、字の意味を覚える助けになります。

第三の方法は、ちょっと「二十のとびら」に似ております。「植物ですな。」というど、「木へん。」とか「草かんむり」が、字の上か左についているのです。「材」「板」「柱」「根」「植」「橋」とか、「花」「芽」「茶」「草」「葉」などは、みんなこの類です。

そのほか、人へん、口へん、土へん、女へん、門がまえ、ウかんむり、竹かんむり、雨かんむり、しんにゆうなどたくさんありますね。それぞれについて、知っている字

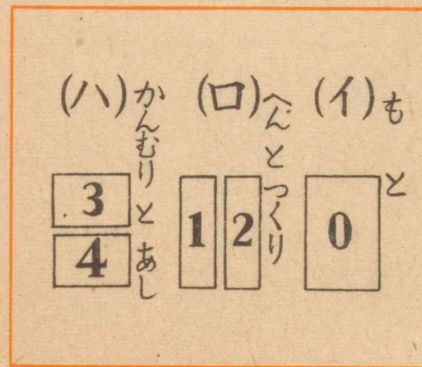
末	本	東	森	林	明
末	本	東	森	林	明

を考えてごらん下さい。

### 3 漢字の形と音

漢字の形をよく調べてみると、どの字にも次ぎの二つの点があり、きつとそなわっております。第一は組み立てる前の形、第二は組み立てた後の形です。

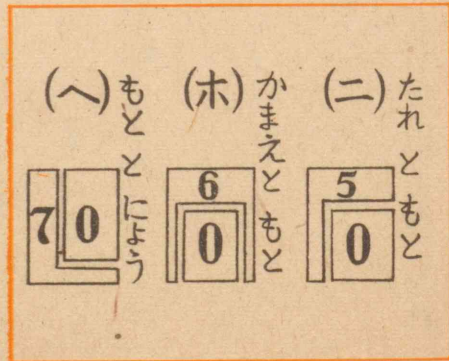
「日」とか「月」とか、「木」とか「田」とかは、みみな組み立てる前の形で、しかもそのまま一字です。こういう字は、二つまたは三つが組み合せて新しい字を作ります。たとえば、「林」は木が二つ、「森」は木が三つ組合って一字になっています。



そこで、おもしろいのは、どんな漢字でもその組み立てを分けてみると、次ぎの七つになるといふことであります。

1. へん 明 (日へん)
2. つくり 明 (月づくり)
3. かんむり 花 (草かんむり)
4. あし 花 (化あし)
5. たれ 店 (まだれ)
6. かまえ 間 (門がまえ)
7. にゆう 近 (しんにゆう)

私たちが漢字の字引をひくときは、いつでもこの組み立てに気をつけ、それから「かく」といって線とか点の数によってべ



ージをくるのです。

字引をひいたとき、その意味を見るのはもちろんたいせつですが、それとともにわすれてならないのは字の読み方、すなわち音おんです。音には「じ音」と「くん音」があります。たとえば、

「サン、セン、ソウ、モク」（山川草木）とか、「トウ、ザイ、ナン、ボク、（東西南北）」というのは「じ音」で、これを「やま、かわ、くさ、き」とか、「ひがし、にし、みなみ、きた」というのは「くん音」です。

#### 4 仮名はどうしてできたか

仮名にはかた仮名とひら仮名とがあります。どちらも漢字をもとにして、わが国で作られ

伊江加千  
イエカチ

奈乃比保三利呂  
ナノヒホサリロ

たのです。その年代は、はっきりはわかりませんが、千年以上のむかしであるといわれています。

かた仮名とひら仮名とは、だれが見ても感じますが、ちがいますね。なぜでしょうか。

これがわかれば、できかたもすぐわかります。それは漢字でいえば、かい書と草書のちがいです。つまり、四角な字とまるい字です。

かた仮名は全部とはいえませんが、多くのものが漢字の「かい書」からできています。そしてひら仮名はその全部が漢字の草書からできています。また、かた仮名はその全部では



左	久	幾	加	衣	宇	以	安
さ	く	き	か	え	う	い	あ
さ	く	き	か	え	う	い	あ

ありませんが、大部分が漢字の字形の一部分から作られており、ひら仮名はその全部が漢字の字形から作られております。こうしてできあがった仮名には、その字の名まえだけが残りしましたが、もとの漢字についていた意味はなくなってしまいました。仮名の名まえはその字のはたらく音です。

### 5 ローマ字のできかた

ローマ字もいちばんはじめは絵文字でした。それがだんだん形が移り変って今のよ

川	知	太	寸	之
つ	ち	た	す	し
つ	ち	た	す	し

はたらく音はわりあいによく似ていますから、世界に広く通用するのです。

うになりました。今では絵文字時代の意味

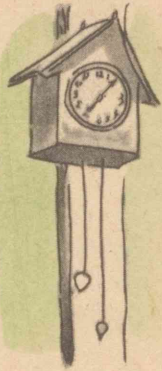
はどの文字にも残っていません。また、文字についている名まえも、あるいは時代によって、あるいは国によってちがうこともあります。けれども、



四 工夫の楽しみ

(一) こわれたポータブル

「ひろすけ、もう起きなさい。学校ですよ。」  
おかあさんの声に、しぶしぶ頭をあげた  
ひろすけが柱どけいを見あげると、なる  
ほど七時過ぎていた。しかし、あわてな  
くてもよいとひろすけは思った。ご飯を  
いそいで食べて、うちをできればもうすぐ  
そこが学校である。顔あらいが五分、ご  
飯が十分、とちゅうが十分、大じょうぶ。

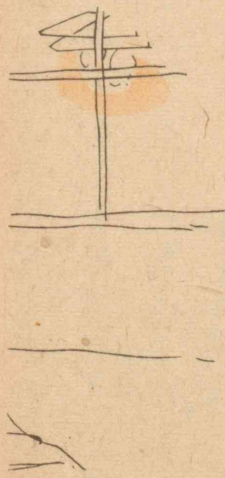


エジソンは一日のうち、三時間しかねなかつ  
たり、いくばんも夜ふかしを続けたり、研  
究にむちゅうになつてとけいをゆでたまご  
にしたり、……いや、あれはちがった。た  
たまごのほうはニュートンだったかもしれぬ。それにしても、  
ぼくは少しねすぎるようだ。もう少し早く起きるようにならう。  
ああ、それにしても、ゆうべは少し夜ふかしたな。どうも  
あの変圧器のコイルまきは、きれいにまけなくて時間ばかりか  
かって……。」

「ひろ、早く起きないと学校がおくれるぞ。」  
「うん……。」  
ひろすけは、たいへん理科のすきな少年である。望遠鏡を自

分で作って月の面をのぞいて、テイヒヨ山の口からひろがる放射線を見つけたしたり、ブレイヤデス星団の美しいのにびっくりしたり、今度は写真機を自作して弟と妹を写してみたり、というとかん単だが、望遠鏡を作るのにも、写真を写すのにも、たっぷり三か月以上も研究や製作に打ちこんで、何回作りなおしをずるかわからないほど根気がよいのである。だからそれができあがったころは、だいたいのそのほうのことはそうどうの専門家になってしまふ。そんなふうだから道を歩く時も注意ぶかい。この間のばんも、電燈がガラスにうつっているのを見て、

「おとうさん。ガラスは一まいなのに、なぜ電燈が二つつつ



て見えるのだらう。」

「いったいガラスは、どうして

光を反しやするのだらう。」

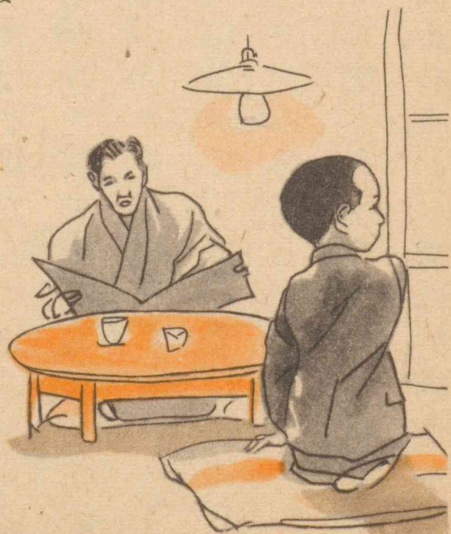
「ふつうの物は光を通さないのに、

ガラスはどうして光を通すのだ

らう。」

と次ぎ次ぎに質問をして、父をこま

らせたものである。まあ、ひろすけはこういった子供なのである。



小林先生は 今度、新しく入学してきた一年生の受持である。たいへんやさしくて、それに、ダンスのじょうずな先生である。

だから一年生を受け持つと、子供たちと唱歌を歌ったり、遊  
ぎをしたりしてくださるので、子供たちもとても喜んでい  
る。

ちく音機がほしいな……。電ちくならなおうれしいけれど……。

小林先生は、町のある店ですばらしい音をさせていた電ちくの  
ことを思いだしていた。あれで楽しい童よりのレコードをかけ  
て、子供に遊ばせたら……。先生は子供たちの目を思いう  
かべた。そうだ、学校にポータブルがあったけ。あしたさが  
してみよう。小林先生は、あくる日、さっそく職員室をさがす  
と、たなの中にいろいろな書類の下になって、ほこりにまみれ  
たポータブルがあった。

取り出してほこりをはらってみると使えそうである。ねじを  
かけてまわしてみると、ごとごととまわるが、機械が調子づい

てくると、ガリガリとひどい音がしはじめるのである。まいて  
みたり、まわしてみたり、止めてみたり、先生はだいぶいじつ  
てみたが、このガリガリはなかなかおもしろい。そこへ、  
あつらえむきにはいつてきたのがひろすけ  
である。ひろすけは、実は自分の受持の

徳山先生に、そうじのできたことを報告  
にきたのであるが、先生がいらっしや  
らなかつたので、ついに小林先生につか  
まったわけである。

「ひろちゃん、あなた機械がすきで  
しょ。これ、なおしてよ。うちへ  
持って帰ってもいいから。」



「はい。でも、ぼくになおせるかしら……。」

思いがけないことだったので、ひろすけもちよっとおどろいたが、もともとのようなことの大すきなひろすけは、それでも、おっかなびっくりで、うちへ持って帰ったのである。

さて、ポータブルちく音機を持って帰ったひろすけは、自分の室へはいるなり、ポータブルを前に置いて、考えはじめた。

あのへんな音は機械の中であるのだから、一度取りはずさなくてはならない。それならば、どのねじをゆるめればよいか、ゆるめていけないねじはないか。それはわかった。でははずしてみよう。中にはど

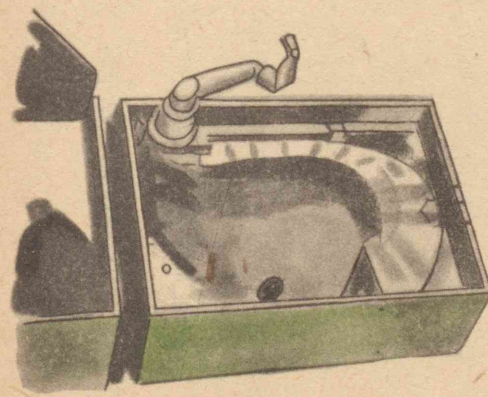


んな機械があるだろう。ひろすけはねじまわしで、上板のまわりを止めてあるねじをそろそろとぬいていった。ぬきとったねじは、小さなはこに大じそうに一つ一つ入れた。

いつか目ざましどけいを分解して、ねじを一つ一つなくしてしまつて、とてもこままったことがあった。それから、はずしたねじは、こうしておくことにしたのである。ぬき終ると、板のふちに手をかけて、ぐっと持ちあげた。中から出てきた機械と、いうのは、ひどかたまりの小さなしかけだけである。(第一図)ひろすけが見たものを書いてみると、

1. 丸い大きな「かん」

2. それをはさむように取り付けられた、二まいの大きな歯車。  
 3. 小さな歯車が二つと、それにかみ合う中ぐらいの歯車二つ。  
 4. ウォームと、そのじくについている、丸い二つの玉。  
 たったそれだけである。どんなすばらしいしかけになっている  
 るかと、ラジオの中のようなものを想像しながら、手を動かしていたひろす  
 けは、おやおやおやと思わないわけにはい  
 かなかつた。これでよく、あんなりっ  
 ぱな音楽が出るものだな……。ここで  
 ねじをかけて調べてみると、この機械  
 はただ、レコードをのせる台をまわす  
 だけのしかけであることがわかった。



では、あの音楽を出すのはどこだろう。機械を置いたひろす  
 けは、今度ははこの方を調べた。(第二図) こちらもすこぶる  
 かん単である。

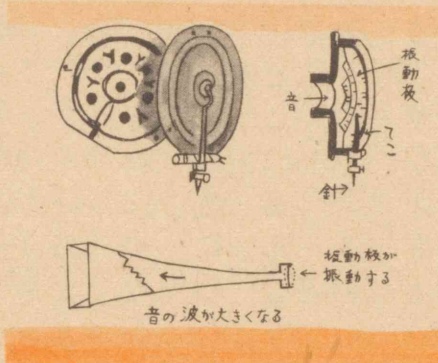
1. ラッパのようにひらいてある四角な木のつつ。  
 2. それにつながっている金属のまるいつつ。  
 3. その先についているサウンドボックス。  
 どこにあんなりっぱな音を出すしかけがあるのだろう。サウ  
 ンドボックスのはりに指をあてると、サラサラと大きな音にな  
 る。サウンドボックスをはずしてみると、図のようになってい  
 ることがわかった。(第三図の断面) はずしたままで、はりに  
 さわっても、かなり大きな音である。耳元にもってきてやって  
 みると、とても大きな音である。これから管を伝わる間に、音

はこの管の通りにひろがって、大きな音になるのだな。楽隊の  
ラッパや、メガホンと同じなんだ。レコードのみぞに、このは

りがはまる。レコードがまわるにつれて、  
このみぞの波がはりをしん動させる。その  
しん動が音楽として聞えるわけだ。

すると、あのへんな音は、どこだろう。

もう一度機械の方に向いて、ひろすけはね  
じをかけた。そしてまわしてみると、少し  
勢がついてきて、ガリガリガリと、今にも  
こわれそうなすごい音がするのだった。歯車はどこでもまわっ  
ている。このすばらしい速さでまわる二つの玉が、どこかにぶ

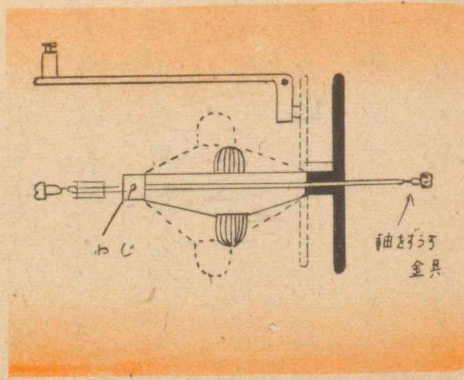


つかるらしいぞと、回転を止めてみると、  
二つの玉はすうっと寄り合ってせまくなる。  
おや、またまわしてみると、勢がつくに従っ  
て、ひろがっていき、大きくまわる。わかっ  
た。この玉が外わくにぶつかるのだ。

(第四図)

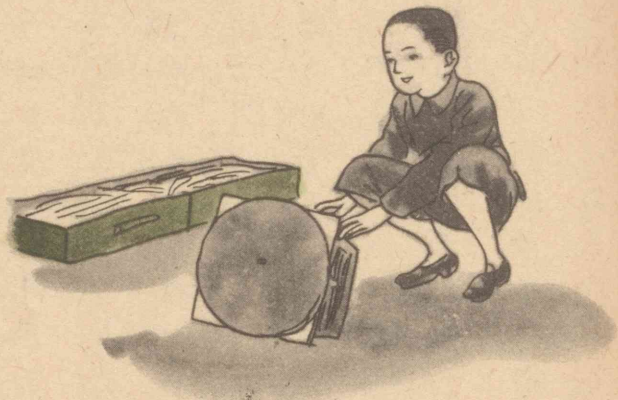
それはなぜか。その前に、いったいこの

玉はどんな役目をしているのか。ひろすけの疑問がそこにひっ  
かかってしまって、まわしたり、止めたりする度に、機械はガ  
リガリと悲鳴をあげる。その度に、玉もひろがったり寄ったり  
する。おや、玉がひろがる時、この円板が寄ってくるぞ。ああ、  
ここにブラシがある。これで円板にさわるようになっている。



これでさわるとどうなるか。ブラシのてこを動かすと、ブラシがうまく円板にさわった。すると回転が急におそくなった。はなすと速くなって、玉がひらきすぎて、ガリガリと始まる。何度もやってみた。わかった。このブラシが届かないのだな……。

ひろすけは、機械の回転を止めて、ブラシをていねいに調べた。ブラシはラシヤで作ってある。それが黒くなってすり切れている。あまり使いすぎたのだな。ではどうすればよいか。つまり、この円板をブラシに近づければよいのだ。そのつもりで調べると、じくをずらす金具(一)と、ねじ(二)が見つかった。このばあい、(一)のほうでずらすのがかん単らしい。ひろすけは、ねじまわして少しずつ左右のねじを動かして、このじくをブラシの方へ寄せた。これでブラシのききがたいへんよ



くなったようである。さて、と機械をまわしてみると、玉もひらき、円板が寄ってきてブラシにさわって、もうそれ以上速くはまわらない。そしてガリガリという音をたてなくなった。たったそれだけだったのだ。つまり、ブラシのラシヤがすり切れて、まわりかたが速すぎただけのことだったのだ。

あの町この町、

日がくれる、日がくれる。

いまきたこの道



帰りゃんせ、帰りゃんせ……

あくる日、小林先生の教室のまどから聞こえるレコードに、ひろすけはうれしそうに耳をすましていた。

そしてあのサウンドボックスの

一まいのしん動板から、どうしてピア

ノはピアノらしく、歌の声は歌の声らし

い音を出すことができるのだろうか。また、

ピアノと歌声が、同時に出ているのはどうしてか、

そればかりではなく、ラッパ、ふえ、バイオリン、ピ

アノと、たくさんのおんがきの音を一度に出すことができるのは、  
どうしてだろうと考えていた。



(二) スイスのとけい

ノイエンプルグの町を出はざれると、四方は高い高い山また山で、おごそかなけしきが目の前にひらけます。

「あの山のかげは、もう、この世ではあるまい。」

と思うほどですが、実はなかなかそうではないのです。山と山との間の細いすきまを、つづらおりにぬってのぼりつめると、そこに思いがけなくも台地がひらけていて、人家はちらほらながら、一つの村里がつくられています。ここはスイスのアルプス山中、海ばつ一千メートルのユーラ村です。

もとよりいいようもないひどいあれ地で、ぎくぎくの岩のかけらの積み重なった地面は、一本の野菜もできず、一つぶの赤



いくだものもみのるところではありません。ま夏でもまどを二重にせねば、夜の寒さをしのぎがたいくらいですから冬の寒さといったら、まったく想像もおよばないひどいものです。

ふもとのノイエンブルグで、むらさき色にじゆくしたぶどうをとりいれる秋ばれのところ、ユーラの村はもう一面銀世界で、ふきあげふきおろす雪のうずまきに、一步も家の外に出ることはできません。

ユーラの村の家は、半分以上、アルプスのぼりの旅人をとめる宿屋ですが、これとても夏だけの商売で、秋から春にかけて

は、全くひまです。そこで村人は全部、何かしら細工物を作ります。どういうものか、ユーラの村人はそろいもそろって、手先が器用で、頭がちみつですから、他の国の工場などで働こうという人があると、引っぱりだこのありさまでした。

時は千六百八十年のある日のことでした。長い間、山を下って、他国の工場で働いていたエアンというひとりの青年が、久しぶりで、ユーラの村に帰ってきました。山にさえぎられ、雪にとじこめられている村人は、こうして他国から帰ってくる人がある、まるでりゆうぐうからきた人でもあるように、めずらしがって、むかえるのでした。

「エアンが帰ってきた。」

ということばが、ラジオの放送のように村じゅうにひびいて、

わかい人も年とった人も、ぞろぞろとエアンの家におしかけてきました。

「やあ、りっぱになったなあ。」

「どこの国へ行ってきたかね。」

「どんな仕事をしてきたの。」

というように、次ぎ次ぎにたずねます。村人のひとりが見かけないものを見つけてきました。

「エアン、おまえのむねのところにある、その光るつなはなに？」

「これですか。」

といって、エアンは得意そうに



その銀色のつなをするするとひっぱりました。するとチョッキのポケットから、同じ銀色をした、まるいまんじゅうのようなものが、そのつなの先にぶらさがって出てきました。これこそエアンがいちばんじまんのおみやげであったのです。



「これは、どけいというものでね。つまり時をはかる機械です。ロンドンで買ってきたんだが、むこうではこんなすばらしい機械ができているんだから、まったくかないませんよ。みなさんもよく見てください。」

こうした細かな細工物にしゅみを持つ村人たちは、たまげきつ

て見ています。

「おどろいたもんだなあ。あんな小さな虫みたいなものが、くるくる動いているぜ。」

「こんな小さなものが、ひとりりで動いて、ひとりりで時間を知らせるなんて、まったくたまげたものだ。」

「それにしても、エアンはしあわせものだ。こんなすてきな機械を手に入れてきて——。」

こうして、どけいを持っているというだけで、エアンはユラ村の人気者になってしまいました。

ところがある日のこと、エアンの大じな大じなどけいが、ぴたりと止まったきり、おしてもひいても、いっかな動かばこそ、だまりこんでしまいました。エアンは顔色を変えておどろきま

した。それもそうでしょう。もしこのどけいが止まったきりになつてしまつたら、それどいっしょに、エアンの人気も落ちてしまふかもしれないのです。なんとかなおしたいものだど、うらのふたをあけてみると、あまりこみいついて、とてもみている勇氣もありません。またふたをして、

「どこにこしようがおこつたのやら、てんでけんとうがつかない。どうしてもこれはロンドンまで持って行かなければならまい。」

しよげきっています。

エアンのどけいが病気になるつたと聞いて、正じきな村人たちは、ぼつぼつ見まいにきました。

「それは、お気のどくだ。ものはためしだが、一度リハルトに

見せたら……。」

ひとりがいいたしました。他の人々は、

「そうねえ、あの子どもは機械気ちがいはちがいないが、いくらなんでもかい中どけいには歯が立つまい。」

「なにしろ、とけいなんて、まだ見たこともないんだらうから。」

「だめだらうよ。いなかの機械と、ロンドンの機械とは、たちがちがうから……。」

と、頭からばかりにして、とりあいませんでした。

けれども、何日たってもとけいはいきかえりませんので、どうせだめだらうとは思いつながら、とにかく、リハルトをよんで、見せることにしました。

「おい、リハルト。これはロンドンから買ってきたとけいだ。」

高い機械なんだがね。ちょっとぐあいが悪くなったのだ。どうだ、おまえになおせるか。だが、むりをして、こわしてしまつてはいけないよ。高いめずらしい機械なんだから……。」

ものをたのむのか、おどかすのかわからないようないかたです。

リハルトは、やっと、十三四の子どもですが、「機械気ちがい」「機械小ぞう」と、あだなをつけられているだけあって、機械にたいする熱心さは、実におどろくばかりでした。これまでも自分の考えから、いろ



いろこみいった機械を作ったことでもありますし、機械がこわれたなどと聞こうものなら、どこの家の機械でもかまわず、自分から出かけて行って、なおすというありさまでした。日どけいならいくつもこしらえたことがあります。ほんとうのかい中どけいはまだ見たことがありません。

エアンの手から止まったどけいを受けとったりハルトは、別におどろくようすもなく、すぐさまうらのふたをあけました。そうして、一つ一つのねじをぬき、齒車をはずして中をのぞき



こんでいきましたが、やがて、  
「うん、これはわけなくなおるよ。」  
といます。

「なおるか？おまえに。」



「ああ、ぼくにだってなおせる。」  
「いやにあっさりいうが、大じょうぶかい。」  
「大じょうぶさ、こんなおもちゃみたいなもの。」

「じゃあ、さっそくなおしてもらおうか。」

そうそう手軽になおるものかというはらがみんなにあるものですから、子どものリハルトにたいして、こごとでもいうようなことばつきです。

「ええ、なおしてあげよう。けれども、五とおりか六とおりの道具がなくてはだめだよ。」

「じゃあ、やっぱりなおらないんだなあ。」

「なおるさ、その道具さえあれば……」。

「その道具はロンドンに行かなくなつて、自分でこしらえればできる。ただそれをつくるのに、三四日ひまがかかる。」

どこまでも自信のありそうな話ですから、エアンはリハルトにたのむことにしました。リハルトは三四日かかつて、しゅうぜんに入用な道具をこしらえました。それで、こしゅうをなおすと、しばらくねむっていたとけいがコツコツと動くようになりました。

「リハルトがエアンのとけいをなおした。」

これが村中の大評判になりました。

「それはえらいやつだ。おれもあれはただの機械いじりではな

いと思つていた。」

などと、今になってそんなことをいう人も出てきました。リハルト少年は急にえいゆうのたまごかなにかのように、尊敬されるようになりました。

「あの子どもは、いまにきつとエアンが持ってきたのに負けな  
いような、りっぱなとけいを作るかもしれないぜ。」

という人々の想像が、いつのまにか、

「リハルトは、エアンのとけいを改良して、もっといいとけいを新しく作りはじめたよ。」

という、まことしやかなうわさどかわっていきました。

こうなると、エアンの人気は、落ちてしまつて、機械小ぞうのリハルトがユーラの村の人気者となりました。

エアンのどけいをなおしてみると、その組み立てのおもしろくできてゐるのに、リハルトはすっかり感心してしまいました。「おもしろい。まったくおもしろい機械だ。そしてちようほうだ。これからはどんな人も、かい中どけいを持たなくてはならない世の中になるだろう。そうすると、世界中の人間の数だけかい中どけいがあることになる。これはとても大へんな大仕事だ。そうだ、ぼくはどけい屋になろう。どけいだって何のことはない。歯車じかけだ。歯車さえ作ることができれば、あとはわけない。」

こう心にきめたりハルトは、自分の手製のしゆうぜん道具を持って、村をはなれ、山をくだって、歯車製造の本場と聞いたゲンフの町へと出かけて行きました。

いよいよゲンフの町について、のぞみどり歯車工場の職工にはいりましたが、その主人は、歯車を作るひけつを教えてくださいません。いけど手をついてたのんでも相手にしないのです。

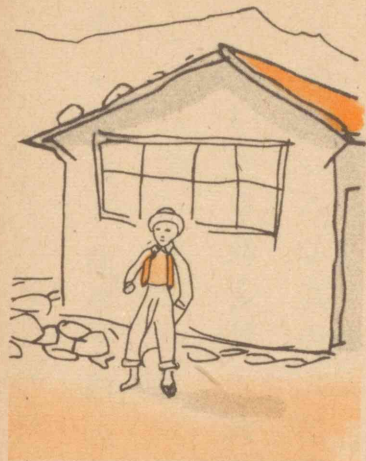
「それはおまえ、自分で考えたらいいだろう。せっかく苦心して考え出したものを、むざむざ人に教えられるものか。」

「ようし、教えないというの

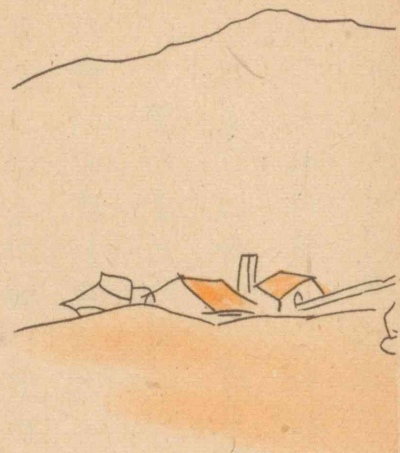




なら教わらない。人の考えつくものを、自分に考えられない  
ことはない。」  
と決心し、リハルトは二度と教わろうとはしません。そしてあ  
い変わらず、齒車工場に働きながら、夜となく、昼となく、工夫  
に工夫を重ねて、とうとうりっぱな齒車の作り方を考え出した  
のです。



何年ぶりかで、機械小ぞうのリハル  
トは、アルプスの山のふところ、ユー  
ラ村に帰ってきました。そしてエアン  
のような根のない人気者ではなく、ま  
ことの力をもった人気者となりました。  
リハルトはユーラの村に、小さいな



がらも、整ったとけい工場を造り、た  
くさんの村人をやとって、とけいをこ  
しらえることに手をつけました。世の  
中は、だれでも一つのとけいはぜひい  
るように入進できました。そうなる  
と  
いくら作っても間にあいません。

まして、機械にかけては天才をもっているリハルトが自分でい  
ちいちかんとくし、手先の器用さにかけては他国人のまねので  
きなないユーラの村人が、たましいをうちこんで作るとけいです  
から、その正しさ、調子のよさは、他にくらべるものがなく、  
たちまちのうちに、「スイスどけい」として、世界中にも名高  
くになりました。

注文は後から後からと、限りなくやってきました。それとひきかえに、金、銀、白金等がどしどしはいってまいります。ユーラの村は、みるみる大きくなり、にぎやかになり、はなやかになっていきました。

リハルトの工場は、その子どもの代になっていよいよさかんになりました。千七百四十一年、リハルトの死んだころには、毎年十三万このかい中どけいと、千このふりこどけいが、ユーラの村からヨーロッパに送り出されています。

二重のまどの間に、はかなくさくうすむらさき色のサフランの花よりほかに、目を楽しませる何物もなかったユーラの町にも、それ以来、こがね、白がねの花がまばゆくさいて、今になってもしほもうとはしません。

## 五 冬の生活

### (一) スキーの話



雪におおわれた山や野を、すべりまわるスキーのつうかいさは、実際にやってみた人なら、だれでも知っています。まだやったことのない人でも、ほかに類のないそのつうかいさを想像することはできるでしょう。

スキーは、都会の人や、学生のスポーツですが、一方、雪国に住む人にとっては、スポーツであると同時に、じつに便利な交通の要員です。

雪国で生活したことのない人には、ちよつと考えられないでしようが、日本でもヨーロッパでも、スキーの無かったころの



雪国の人たちの生活は、どんなにみじめだっ  
たか知れません。道も川も野も山も、家ま  
でも雪にうずまって、三か月も四か月も、  
せまい家の中にどじこめられていたのです。  
それを思うと、スキーを多くの人に知ら  
せた人の手がらは、口や筆にはつくせない  
ほど大きいのです。

さて、それでは、ヨーロッパにスキーを  
しようかいたした人はだれでしょう。それは、オーストリーの南  
の方の山間チロル地方のリリエンフェルトというところに住ん

でいた、ズダルスキーという医師なのです。

もちろん、そのまえから、北ヨーロッパのノールウェーやフィ  
ンランドには、スキーがあつたのです。しかし、ヨーロッパで  
も、千八百年代は今ほど交通機関が発達していませんでしたか  
ら、北のすみともいふべきノールウェーやフィンランドのこと  
が、中央ヨーロッパには、なかなか伝わってきませんでした。

ところが千八百五十五年に、ノールウェーの名高いたん陰家  
ナンセン博士が、そのころはまだ人間が住んでいなかった北氷  
洋のグリーンランドという大きな島を四十日で横断しました。

その時ナンセン博士は、スキーを大いに利用したのです。そして、  
「グリーンランドたん陰記」という、りっぱな本をあらわして、世  
界にグリーンランドという無人島をしようかいたしたのですが、

その中に、自分が利用したスキーのことも書いてありました。  
ズダルスキーは、このナンセン博士の本を読んで、スキーに  
興味をもったのです。それからいろいろと苦心して、一台のス  
キーを、ノールウェーから手に入れました。

ノールウェーやフィンランドは、おかの多い地方で、大きな  
山はありません。したがってズダルスキーが手に入れたスキー  
も平地やおかにてきするようにできていました。ことに、スキ  
ーとくつをむすびつけるしめ具は、かん単な一本の皮ひもだっ  
たそうです。

ところが、ズダルスキーの住むオーストリーのリリエンフェ  
ルトは、アルプス山脈の一地方ですから、大きな山が多く、こ  
の皮ひものしめ具は工合がよくありませんでした。ズダルスキ

ーは、冬になると、ひとりて近くの山々をスキーですべりまし  
た。だれからも教えられないで練習を続けたのですが、研究心  
の強いズダルスキーは、すべりまわるのに便利なように、だん  
だん改良を加えていきました。

まず急しゃ面をすべったり、のぼったりす

る時に、くつがぐらぐら動かないように

鉄でしめ具を作りました。そして、重

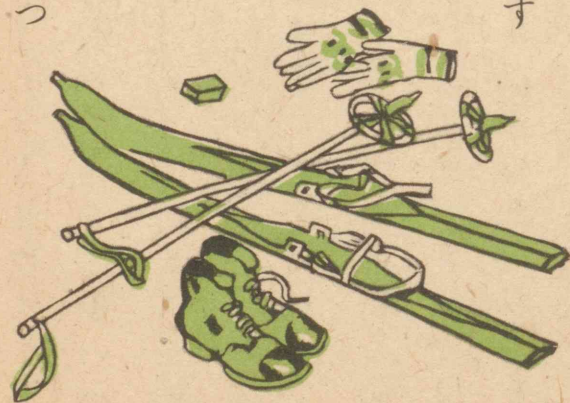
いスキーをなるべく軽くするため、

そのしめ具の中に、バネをしかけたの

です。それから、当時はスキーぐつとい

う、特別のものがなかったので、だれでも

ふつうのくつでスキーがはけるように、くつ



台をのびちぢみでできるようにしました。またノールウエーでは、平地が多かったので、両づえ（二本づえ）だったのを、長い一本のつえにしました。そして独力で、スキーのすべりかたもいろいろと考え出したのです。



このズダルスキーの努力で、スキーは、ヨーロッパの各地に、たいへんな勢でひろまっていきました。そのすべりかたはズダルスキー式、またはその土地の名をとって、リリエンフェルト式とか、オーストリー式などと呼ばれました。

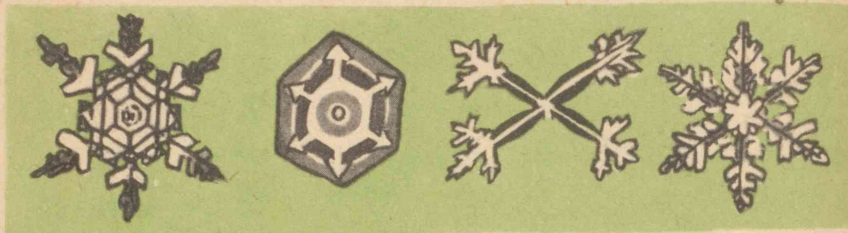
日本にスキーが伝わったのは明治四十二年、そのころスエーデンの公使をしていたすぎ村という人が、三台のスキーを外務

省に送ってきたのがはじめてです。それがズダルスキー式でした。そのスキーを、外務省から雪で有名ないがた県の高田市に送って、研究をさせました。ちょうどそのころ、オーストリーから日本にきていたフォン・レルヒ中さが先生になって、十数名の人々に指導しました。

レルヒ中さは、高田市のある会社に国産のスキーを作らせ、次ぎの年に、高田の町近くのかなや町で、みごとにすべってみせました。それから数年のうちに、全国にひろまるようになったのです。

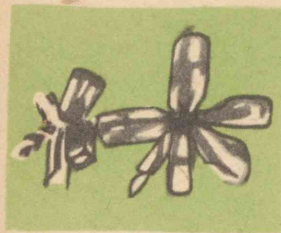
(二) 雪のえい画

雪のえい画を二つ見た。一つは「雪国」というのであり、もう



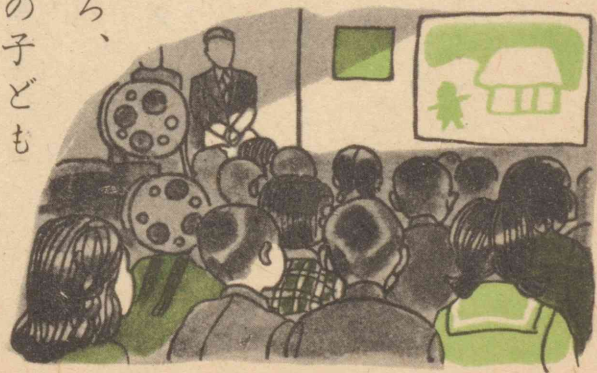
ものではなく、雪の一ひらをとらえてえい画にし、たものである。ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、まことにきれいな形をしていること、しかも、一ひら一ひらの雪が、それぞれちがったけっしょうをしていること、その美しい雪が数限りなく、天上から地上へふってくることなどを写している。

また、どうして雪のけっしょうができるのか、どんな場合に、どのようなけっしょうになるのか、空中の温度の変化、風の関係、水じょう気の量、地上からの高さなど、さまざまなことよって、雪のけっしょうがちがうわけを、えい画的な手法に



ろ 雪どけの水が流れだすところ、それをうれしそうに見ている村の子どもたちなど、雪がふってから消えるまでのありさまを、時間の順序をおってうつしたものであった。もう一つの「雪」というのは、雪景色を写した

一つは「雪」というのであった。「雪国」は、北国の人たちが、雪と戦っているようすを、えい画にしたものである。雪がふりだしてから、だんだん積もるようす、深い雪の中で生活している人々、そのうちに、ようやく春の光がさしそめて、さすがの雪もそろそろけはじめていくところ



よって、よくわかるようにしくんだものであった。

空からふってきた雪の一ひらを受け取って、それをくわしく観察してみると、その雪が、どこで、どのようにしてできたか、その雪が通ってきた空中のようすが、しぜんにわかるというのである。

「雪は、空からのお手紙です。」

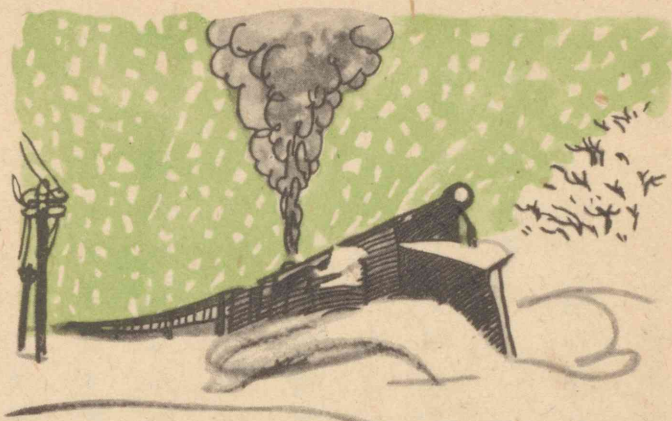
こんなことばによって、えい画は私たちに説明してくれた。一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、確かに空からの手紙にちがいない。「空からのお手紙」とは、うまくいったものだ。

このように、二つのえい画は、どちらも雪にえんのあるもの

であるが、私は後のほうのえい画に心をひかれた。

ふんだんにふってくる雪の中から、一ひらの雪をとらえて、いろいろな角度からながめてみることは、つつましい心なしにはできるものではない。野原の中で、一本の草花を見いだして、それをたんにんに写生するのも、一ぴきのこん虫を調べるのも、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。「雪国」のえい画も決して悪いも





と説明のことばなどによつて、  
ができるそうである。

のとは思わないが、いま少し深く考えれば、さらにおもしろい場面が発見されるように思われる。たとえば、ふぶきなどもその一つである。風にあおられた雪の群が、道を消し、木を折り、汽車を立ち往生させ、人をたおし、ここへ死にさせてしまうことさえある。このものすごいありさまをえい画化することは、たやすいことではあるまいが、ばんそうの音楽や、場面の組み合わせ

ふぶきのやんだ後の、雪の野原のありさまをうつしてもおもしろいと思う。一面の銀世界となった広い野原を、第一の人が歩いて行く。その人の足あとをしるべに、第二の人が歩いて行く。やがて第三の人も通り、第四第五の人も、同じ足あとをたよりに通って行く。ぽつりぽつりとした足あとが、広野を横切る一すじの道となる。その一すじの道をながめると、一直線ではなく、くねくねとゆがんでいく。歩く人は、はじめはまっすぐに歩こうと思ったので





あろうが、いつのまにか曲がってしまふ。どうしてこんなに曲がるのか。風にふかれたからであるうか。足がつめたくなくて、立ち止ったためであるうか。それとも、心の中で考えごとをしていて、思わず方向がちがったものであるうか。

こんなふうに、たとえ一本の雪の道でも、見方によっては、おもしろいことが、次ぎから次ぎへと考えられるのである。



雪国でいちばん楽しいものは、なんといっても、春さきの雪

どけごろである。半年も雪にとざされていた地上に、ぽちつと黒い土が見え始めた時の喜びは、たどえようがない。子供たちは、この黒い土の上に集まって、足でトントンとふんでみたり、しゃがんで土のおいを



かいだり、手のひらでなせてみたり、耳を地べたに近づけたり、なにか物の音でも聞こうとしたりする。

やがて黒いやわらかい土で、ねっ木という遊びが始まる。こままわしが始まる。

こんな場面を、おもしろく編集して、えい画に表わせないものだろうか。

同じ題の作文でも、それをとりあつかう人によって、文章は、どのような書き表わされる。

どのような文章でも、読む人の心がひかれるのは、物事をあたたかくながめた人によって書かれた文である。

## 六 デンマークの二本の柱

(一) 二本の柱

世界中でいちばん小さい国のひとつでありながら、世界中でいちばん幸福な国のひとつ。

ひとしずくの石油もわかず、石炭も鉄こうもほとんど全く出ず、水力電気にもぜんぜんめぐまれていないというふうに、近代産業の栄える条件が欠けているのに、こじきほもと



より、ひどい貧ぼう人のいない、もっとも豊かな国のひとつ。

トマトやブドーがほとんどみのらず、満州でさかんに作られるダイズやトモロコシさえも、花はさくが、実はみのらないというふうに、気候風土にもめぐまれない国でありながら、世界第一の農業もはん国といわれる国。

そのデンマークもはじめから幸福な国だったのではなく、むしろ歴史をさかのぼれば、もっとも不幸な国の一つであり、ことに今から八十年ほどまえ、戦争に負けたあとなどは、全くみじめな国でした。たびたびの戦争につかれていた上に、敗戦のだけきを受け、国民はすっかり気力を失い、国としてはもう立ちゆくみこみがないと思われるほど、どんぞこに落ちこんだデンマークが、わずか数十年の間に、どうして幸福な平和な国を

きづくことができただけでしょう。

それは、千八百六十四年ドイツとの戦いに敗れたその日から、「外に失ったものを、内に取り返そう」とかたく決意して、デンマーク復興のために立ちあがったダルガスの力にまつところがきわめて大きいのです。豊かな土地をうばわれ、大部分やせた不毛に近い土地を残されて、失望のうちにはずんでいる国民をばげまし、防風林もなかなか育たないところに、まず木を植えてかかろうとしたダルガスの苦心は、なみたいていのものではありませんでした。そしてそれは、かれとかれの同志の力だけではどうしていえることではなかったのです。ダルガスが植林事業を始める前に、人を植える大事業をこつこつやっていた大学者グルントウィーがいなかったら、ダルガスの事業は、決して

て芽をふくことさえできなかつたでしょう。学者として宗教家として世界的に有名なグルントウィーは、何事をするにしても、



まず人を植えなければならぬ、そのためには学校という畑を作らなければならないという考えから、今では世界の名だたる国民高等学校というものを、千八百四十四年ごろから始めたのでした。二十年の間そこで次々に教育された人物があつたればこそ、敗戦の祖国を平和な道で立てなおそうと立ちあがったダルガスの精神も理解され、その事業もなしとげられたのです。一見何の関係もないようですが、グルントウィーの教育事業と、ダルガスの植林事業とは、

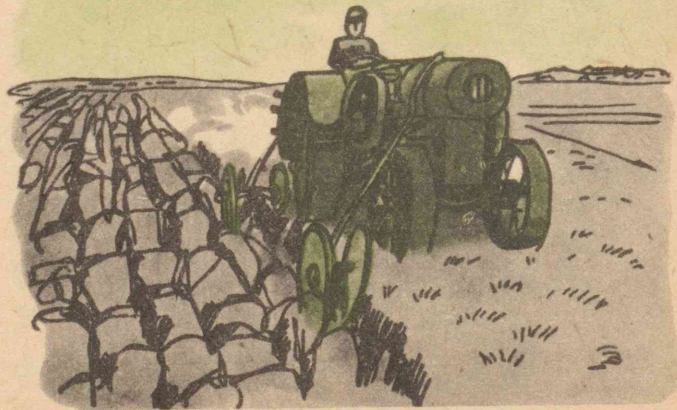
こうして深く結びついて、幸福なデンマークを作りあげたので  
す。グルントウイーの精神的な下ごしらえがなかったなら、ダ  
ルガスの大がかりな土木事業はなしとげられなかったでしょう  
し、ダルガスの国土改良が行なわれず、農業がさかんにならな  
かったら、グルントウイーの精神も栄えるわけにはいかなかつ  
たでしょう。ノーベル文学賞を授けられたノールウエーの大詩  
人ビヨルソンは、

「デンマークの農民は、世界のどの国の農民よりも高い教養を  
持っている。」

と書いていますが、グルントウイーの力によってデンマーク人  
が教養を植えつけられていたからこそ、ダルガスのこんな難な仕  
事もできたのであり、ダルガスによって国土が豊かにされたか

らこそ、今日デンマーク人はそれほど  
高い教養を身につけることができよ  
うになったのです。

実際に、ダルガスが植林とこう地の  
開たくを始めたとき、グルントウイー  
の国民高等学校の運動も、それとなら  
んでさかんになっていました。ダルガ  
スの事業をはかどらせたのは、国民高  
等学校の卒業生でしたが、かれらが植  
林や開たくに示した真剣な活動ぶり  
によって、国民高等学校は、いっそうさかんになっていったので  
す。グルントウイーとダルガスは、ほろびようとするデンマー



クをささえた二本の柱だということができます。

「神は自から助くるものを助く。」

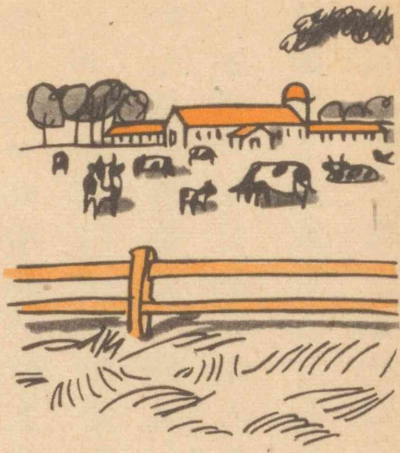
それがグルントウイーの教育の出発点でしたが、ダルガスもまた、戦いにやぶれて他国をうらまず、他国にたよらず、自らの力をたよりに立ちあがったのです。

デンマークはドイツ、オーストリーと戦って、文字どおり一敗地にまみれ、いちばん土地のこえたシュレスウィヒ・ホルユタイン地方をうばわれましたが、ダルガスはこれを取り返すことを考えず、残されたこう地を豊かにするため、土にいどみかかったのです。グルントウイーとその弟子たちは、ドイツとの境に



ほう台をきづくかわりに、学校を建てました。

まことにかれらは、けんを持って外と戦おうとはせず、スキを持って内をたがやしたのです。旧約聖書のあの尊い精神が力強く実行されたのでした。



かくして、そのけんを打ちかえしてスキとなし、

そのヤリを打ちかえしてカマとなし、

国は国に向かいてけんをあげず、

戦争のことをふたたび学ばざるべし。

こうしてデンマークはよみがえり、豊かな平和な国がきずきあげられました。土地をたがやしでは、世界一の農業国となり

人を養っては、世界で指折りの文化国となりました。広さや人口からいえば、戦争前の日本の二十分の一ぐらいですが、外国貿易にかけては、日本の貿易総額の二分の一に達していました。つまり、デンマーク人ひとりあたりの貿易額は、日本人の十倍に当たっていたわけです。文化の方面でも、いっぱん国民の教養が高いことは前にも書いた通りですが、みなさんにもなじみの深いアンデルセンのような世界にならびない童話作家、世界のちようこくに一新紀元をかくした芸術家トーワルドセン、天才的なてつ学者キルケゴール、現代言語学の第一人者エスベルゼンなど、たくさんのお大人を出しています。しかし、この文化国家も農業王国もあの二本の柱が無かったら、きずかれなかつたにちがいありません。

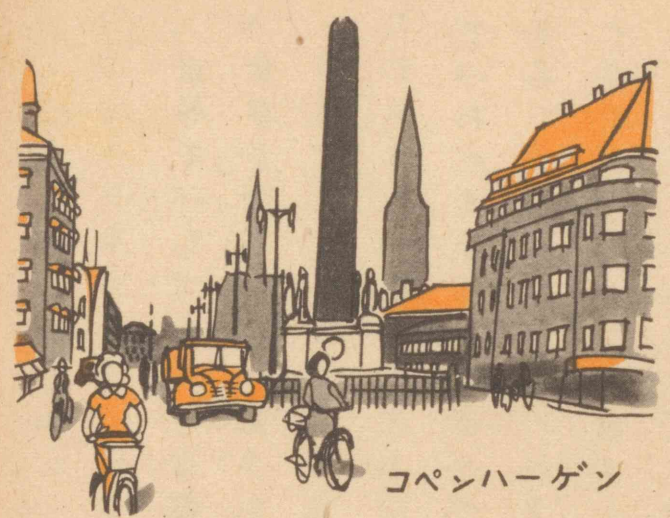
(二) 風と土にいとむ

「世界でいちばん大きな都のロンドンで食事をすることがあったら、いちばん上等のバターを注文してごらんさい。きっとデンマーク製のバターがでますから。」

といわれます。それほどデンマークのバターは有名です。そのほか、ベーコンやチーズや牛肉やタマゴなどのちく産品にかけて、デンマークは量の点でも質の点でも世界でもっともすぐれています。バターについてみても、世界のバター貿易全体の三分の一ちかくを、九州ぐらいいしかな



いあの小さな国でしめた年さえあります。このようにデンマークはヨーロッパ第一のちく産国ですが、その気候はちく産にも

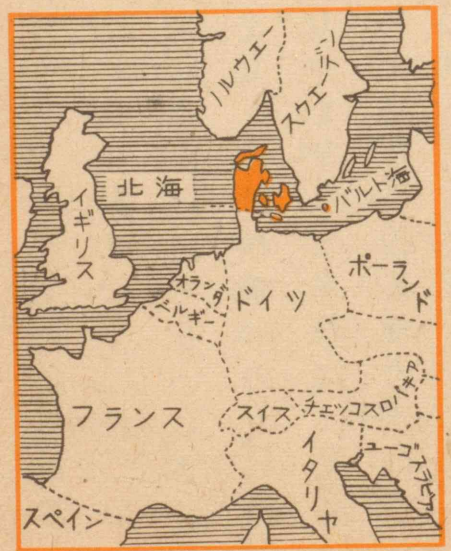


コペンハーゲン

適してゐるとはいえないのです。一ばん気候のよい首府のコペンハーゲンあたりでさえ、日光を見る時は一年をつうじて五十日ぐらいに過ぎず、一年のうち四分の一は、こいきりにどざされ、家ちくは九か月の間も小屋の中でかわなければならぬといふありさまです。それもそのはず、その国土の南のはしが千島列島の北のはしよりも北に當っており、北海の

のつめたくしめつた強い北西風が絶えずふきつけ、夏のさなかでも毎夜のようにしもがおりるのでした。何の資げんもない上このような気候風土ですから、全くデンマークは自然からまますあつかいにされたといつてもよい国です。しかも戦争に負け、いちばんよいところを取られてしまったのですから、国民ががっかりして、何をする元氣もなくなつてしまつたのも、無理がないといえるでしょう。

国民のなかには、国と国との間の関係の複雑なヨーロッパのことだから、イギリスやドイツやロシアの勢力をうまく利用してうかび



あがることをはかるほうがかしこいと考え、投げやりはその日ぐらしをしていようというものも少なくありませんでした。しかし工兵士官エンリコ・ミリウス・ダルガスは齒をくいしばって、日夜復興の方法を思いめぐらしました。かれの心の中には、敗戦を待たずに、ある計画がうかんでいました。それは、デンマークりょうの半分をしめるユトランド半島の約三分の一が不毛のこう野とぬま地であるのを開たくして、豊かな土地にすることでした。面積四万五千平方キロのデンマークにとって九千平方キロもの広い土地があるにまかされていたのです。これを生かすことができれば、失ったシュレスウイヒ・ホルシュタインりょうのうめあわせをすることも、こんなではありません。海岸に出れば、一年じゅうふきすさぶ北西風のために、すな



が二メートルも積もり、どころどころにある防風林もみな南東にかたむき、かろうじて生存を保っているありさまです。ダルガスはこれに対し、二つの武器をとって立ち、このこう野をせいふくしようど決心しました。二つの武器とは水と木です。水はけの悪いぬまからは悪い水を流しだし、さばくのようなこう地には水を注ぐようにし、ヒースばかりの所にモミのようなよい木を植え、風を防ぎ、温度を調節し、土質を改良しようというのでした。それは決してただの思いつきではなかったのです。

ダルガスは軍人でしたが、無鉄ぼうな思想家ではありません



でした。工兵として戦争に従っている間にも、この地方の地質や地勢を熱心に研究しておきました。彼の計画は愛国的なぼうけんでしたが、科学的な実際的なこんきよを持っていました。そればかりでなく、古いむかしのいせきを発くつしてみると、この地方にも人々が住み、土地をたがやし、家ちくを養つていたことが確かめられました。ダルガスは確信をもって、ユトランドこう地開たくの計画に人々の協力をもとめました。

しかし、かつてはスウェーデンや北ドイツを治め、ノールウエーをもちよう土にしていたデンマーク人は、むかしの強国時代のぐちをいうだけで、じみな建設に努力しようという気になりませんでした。また、計画はいいが成功するみこみはない。げんに千七百五十九年にドイツ人がユトランドのヒース地帯に

決死的な移民をいれて、はい水、かんがい、客土などあらゆる方法をこうじて、開発をはかったが、さんたんたる失敗に終わったではないか。そういつて、ダルガスの計画を非難しました。

しかしダルガスはくっしませんでした。今までは、政治が外にばかり目をつけ、りよう土をひろげることや、取り返すことにしゅうちやくしてきたため、戦争を重ね、国内の建設はほんどうに考えられなかったのだ。こんなことをくりかえしているのは無意味だ。そういつて、力強く人々を説きました。

ようやくダルガスはビタアセン、ドリユウセン、モルビン等の同志を得て、千八百六十六年の三月、デンマークヒース協会を興し、はげしい風とあれた土にいどむ大事業にとりかかりました。

(三) 最も悪い日を

「デンマークにとってこんなに悪い時代はない。」  
と、みんなはなげきました。ダルガスもそれをひていすること  
はできませんでした。しかし、

「デンマークが立ちなおるのに、こんなよい時代はない。」  
と、かれはかたく信じていました。

もちろん、それをはつきり口に出し  
ていうことはできませんでした。そん  
なことをいえば、戦争に負けたことを  
喜んでいるうらぎり者とののしられた  
でしょう。かれはただ実行によって自



分の信念を示すほかはないと思いま  
した。

それでかれは、

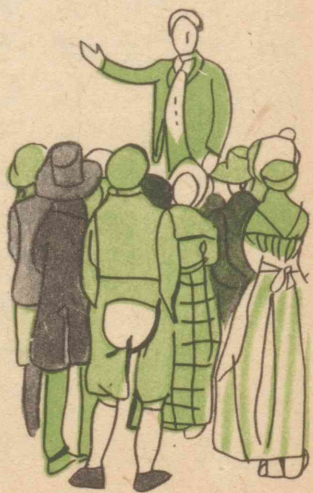
「全くデンマークにとって悪い時だ。

だが、われわれは、外にうしなつ

たものを内に取り返すことはできる。それはだれにもえんりよ  
はいらないし、だれにもめいわくをかけはしないのだ。われ  
われの生きている間に、ユトランドの広いこう野と、うるお  
いのないすな地をバラやサフランの花さく所にしてみせよう  
ではないか。」

ととききました。

かれの口調には、予言者めいたところがありました。それも



道理、かれの血管には、ねつれつなキリスト教徒の血が流れていたので。かれの先祖はフランスの新教徒で、新たな信この自由を唱えたため、千六百八十五年、フランスを追われ、デンマークににげてきたのでした。それだけにデンマークの土地を楽園にすることに、ダルガスは宗教的な使命を感じていました。この点がかれをして大事業をなさしめた大きな力でした。かれはただの軍人ではなく、土木の実際家であり、地質や植物を根強く研究する科学者でもありましたが、それに宗教的な信念と熱情が加わってはじめて、平和の大業に一身をささげることができたのです。科学と宗教とがりっぱに結びつけるものだということが、ダルガスという人によって、証明されているのは、意義深いことといわなければなりません。

ダルガスは、祖国の復興はまず木からだと思いました。緑の木のしげっている国は、必ず栄え、木のとぼしいはげ山やこう野の国は、必ずおとろえます。いや、木のしげっていることは国の栄えている印であり、木のとぼしいことが国のおとろえている印です。過去、現在を通じて、世界の国々の実例がはっきりその事を示しています。デンマーク自身がそうでした。ユトランド半島のこう野にも、八百年前はりっぱな森がしげっており、二百年前までは所々にかしの林が見られました。ところが、ほう建的な大名たちや、よくの深い、目先の見えな人たちが、さかんに木を切つて、もうけることを考え、自然からうばう一方であったため、ユトランド地方は、不毛に近いありさまになってしまったのです。

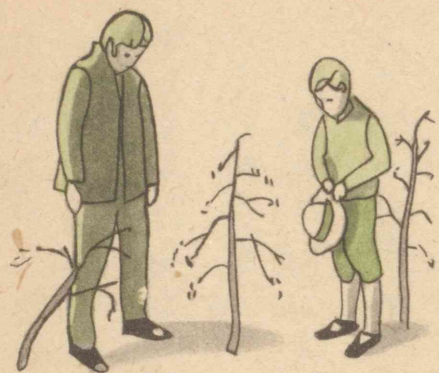
従って、ダルガスは、他の人々のように、ユトランドを豊かな土地にする事が不可能だと思っていませんでした。自然に対して、うばうばかりでなく、手をつくして報いるところがあれば必ず自然は栄えると信じていました。

まずこう野特有の小さな木ヒースをどりのぞいて、みぞをほり、すな地には水を注ぎ、ぬま地からは水を流し出し、ぬまの水位を整えて、土地を開たくすると同時に、どろばいをやせた土地に移して、土質の改良をはかりました。しつっこいヒースを退治するのは、なかなかほねが折れましたが、これまではさしてこん難ではありませんでした。難事中の難事は植林でした。やせた土地、寒風のふきすさぶすな地に何を植えたらよいか、ダルガスもかねがねいろいろためしてはいましたが、いい答が

出ませんでした。かれより八十年ほど前、デンマーク政府がふつうのデンマークモミを選んで組織的に植林を試みたことがありましたが、がんこな土地はこれを受けつけず、失敗に終わったのでした。多少残っていた木と、はびこるヒースに負けて、次第にかれてしまいました。

ダルガスは研究を重ねた結果、ノールウエー産の赤モミがよいという結論を得て、これを植えてみました。なるほど、これはうまく成長しました。が、どうしたことか、数年たつと、この強い木さえやはりかれてしまいました。

ダルガスは、しかしくじけませんでした。



また初めから研究をやりなおしました。そのうちふと思いうかんだのが、アルプス産の小さい山モミのことでした。これに移植してみたらと考え、さっそく取り寄せて、ノールウェーの赤モミの間に植えてみました。すると、ふしぎなことに、この二つの種類のモミはならんでいたわりあうように成長し、年を経てもかれませんでした。

ダルガスは歓喜しました。緑のユトランドを實現しようというかれの希望はかなえられそうになりました。同時に二百五十万のデンマーク国民もようやく希望を持ちはじめました。今まではダルガスのすることをつめたい目で見、気乗りうすで、植林にも心から協力しなかった人たちも、半分はダルガスに対する尊敬から、半分は欲心から、植林に努力するようになりまし

た。ダルガスもそれを利用し、モミを植えれば早く材木がとれて、とくだからといって、みんなをはげましました。「レバートン（ソロモン王の宮でんの材木を出した山）の栄えはあたえられた。」という聖書のことばを方に働いてきたダルガスは心から神に感謝しました。

#### (四) 最も良い日に

しかし、自然はそれほど従順ではありませんでした。事はそうかん単にうまくはいきませんでした。モミは次々と植えられて、緑の野はひろがっていきしましたが、期待したような材木は得られなかったのです。モミはある程度までのびると、そこで成長をやめてしまいました。アルプス産の小モミをなら

へて植えることによつてノールウェー産の大きいモミのかれるのを防ぐことはできませんでした。

ませんが、すすくすくとのびるわけにはいきません。建ちく用の材木が得られないことを楽しみにして、植林にはげんだ農民たちは、失望すると同時に、ダルフガスにだまされたと思つて、ダルフガスをなじりました。

「ダルフガス、あなたの約束をした材木をくれ。」

と、かれらは口々にいつてダルフガスにせまりました。ダルフガスは苦境に追いこまれました。今日では、農村



の共同組合の発達している点で世界無比なほど協力の精神の強いデンマーク人ですが、そのころはまだ産業組合もたいしてできていなかった。植林のような共同事業に対する理解はとぼしかったのです。

それに、千八百七十年ごろからヨーロッパの農産物の価格がひどく下つて農民は非常に苦しい思いをしました。デンマークをはじめバルチック海や黒海にのぞむ諸国は、こく物を西ヨーロッパに売つて、もうけを得ていたのですから、新世界といわれる広く豊かなアメリカやアルゼンチンからたくさんのかく物がヨーロッパにゆ入されてくると、物があまり、価格は安くなり、農民の利は全くなつてしまいました。そのため、デンマークの農民も、苦勞して植林したり、開たくしたりして

も、かえって作物がたくさんできると、ねだんが安くなつてそんをするから、つまらぬ話だといって、ダルガスに協力することをいやがりました。

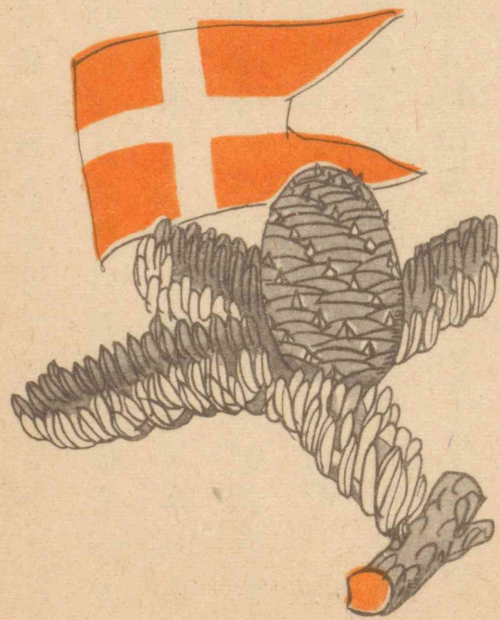
そこで、ダルガスは国民高等学校の卒業生たちと手をにぎつて、農民の利益をまもる共同組合を作ることをすすめ、さらにこく物よりねだんの上つていく速度の早いちく産物へのきりかえをうながすなど、いろいろと手をつくしました。

そのうちにダルガスの長男フレデリックがすばらしいことを発見しました。フレデリックは父の素質を受けついで植物学者の素質にめぐまれていました。わかいダルガスは、大モミがある程度以上に成長しないのは、小モミをいつまでも大モミのそばにはやしておくからであつて、もしある時期に小モミを切り

はらつてしまえば、大モミが土地をひとりじめにするからどんなのびるだろう、という結論を得ました。父ダルガスもなるほどと思つて、その通りやつて経過を見ると、小ダルガスの考えどおりになりました。小モミはある程度までは大モミの成長をうながす働きをしますが、

それから後はかえつてその成長をさまたげるといふ原則が確立されました。ダルガス父子の勇氣は百倍しました。

これはデンマークの復興にとつて、実に大きな発見でありました。古いおとろえたデ



ンマークはわかい科学者によって救われたのです。ユトランドのこう地は、年ごとに青々としげるモミの林におおわれていききました。千八百六十六年にヒース協会のできた時には、ユトランドはヒースのこう地が二千六十五方マイル、ぬま地が二百十五方マイル、すな地が二百方マイルにおよんでいましたが、三十年後の千八百九十六年にはその半分がせいふくされ、ヒース地帯は千二百七十六方マイル、ぬま地は百五十方マイル、すな地は百四十二方マイルにへっていました。反対にまばらな林二百十八方マイルが、七百二方マイルのみつ林にふえていました。そして、その数年後ダルガスが死んだ時には、二千五百方マイルという広い面積がみごとに開たくされていきました。

植林の利益は材木が得られるというだけではありません。木

のはえていない土地は熱しやすく、ひえやすいものです。ユトランドもその例にもれず、夏の晝夜の温度がこんなにちがっては、作物のよくできるわけがありません。従って、收かくの見こみのあるのは、ジャガイモ、黒ムギなど小数の作物にすぎませんでした。ところが、植林が成功してから後は、氣候がいちじるしくやわらげられ、夏にもしもがおりるといふような事は無くなりました。そして、ちく産をさかんにするにつれ、それに必要なし料もじゅうぶんにとれるようになりました。

また、モミがしげるようになってから、北の海からふきつける強い風が防がれ、ふき送られてくるすなも海岸だけでくい止められました。モミの木は力強く根をはり、おそってくるすなばかりに立ち向かい、「ここまではこられるが、ここをこえる



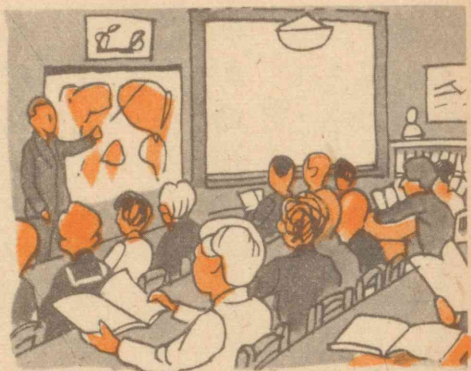
事はできないぞ。」といているようでした。

その上、雨の多い日本よりずっと雨の多いデンマークのこととて、野や畑に水があふれることがめずらしくありませんでした。もっとも、ユトランドはいちばん高い所でも、海ばつ百五十メートルぐらいですから、日本のようなはげしい出水はありませんが、半島全体の高さが海ばつ三十メートル足らずという低地のため、作物も牧草も水びたしになりがちです。それが植林によって救われたことはいうまでもありません。

こうして、戦争で失ったシュレスウィヒ・ホルシュタインはつぐなわれてあまりあるようになりました。その後デンマークは一



デンマークの学校



度も戦争に参加せず、ひたすら平和な国内建設につとめた結果、最初にのべたように豊かな、幸福な国家をきづくことができました。この通り、ダルガスの植林は多くの実際の利益をもたらしましたが、それにも増して大きいのは、無形の收かくでした。失望して無気力になっていたデンマーク人が、グルントウイーの教育とダルガスの事業によって希望をあたえられ、活気のある精神をふきこまれたのです。デンマークの土がよみがえっただけでなく、デンマーク人の心が内からよみがえったのです。これより大きなたのもしい力はありません。わが二宮尊徳先生も、田畑をこやすことよりも、人の心をつち

かうことが本来の願いだといひ、  
「それ、わが道は、人々の心のあれたるを開くを本意とす。あれたる人の心ひとりひらく時は、地のあれたるは何万町ぶあるもうれうるに足らざるがゆえなり。」  
と述べています。

グルントウイーの学校と、ダルガスの植林によって、デンマークは、人類社会の二大不幸といわれる無学と貧苦とを無くすことができました。しかも、この二大事業がデンマークのどん底の時代にとりかかられたことは、まことに意義深く感ぜられます。

こうしてダルガスは、自からにちかったとおり、デンマークにとって、最も悪い日を、最も良い日にすることができました。



### 学習の手引

#### 一 楽しい運動

##### (一) 私の運動日記

- (1) 自分のやっている運動について書いた日記です。毎日どんな運動をしていますか。
- (2) おにごっこはどんなふうにとやると、おもしろいと書いてありますか。またみなさんはどんなふうを考えてやっていますか。
- (3) 平きん台の練習はどんなふうにとやりましたか。
- (4) ドッジボールはどのようにして勝ちましたか。お話ししてみましょう。
- (5) 鉄ぼうは詩のかたちで書いてあります。

どこがおもしろいですが。日記の中にこのように詩をいれるのもいいですね。

- (6) 八日の山のぼりはだれとだれが行きましたか。ちよう上からながめたけしきをノートに書きだしてごらん下さい。

- (7) みなさんもいろいろな運動をするでしょう。それをこのように日記に書いてみましょう。

##### (二) 運動会

- (1) 楽しい運動会の日を書いた作文ですね。よく読みかえしてみましょう。
- (2) まず、文の組立について調べてみましょう。○どんなことから書きだしてありますか。○文の山はどこにあるでしょうか。○どんなことばで結んでありますか。
- (3) 文の中味について調べてみましょう。

○ここに書いてあるえんぎは何と何ですか。  
○どんな気持ちでそれを書いていますか。  
○そのえんぎを、あなたはどっと思えますか。  
○この運動会の日を、作者はどんな気持ちで書き進めていますか。

(4) ことばについて調べてみましょう。

○運動会にかんけいのあることばを書きだしてみましよう。

○そのほかに、あなたの知っていることばがあつたら書きだしましよう。

○意味のむずかしいことばを書きぬいて、よくおぼえましよう。

○新出漢字を調べて、その使いかたや、書きかたをおぼえましよう。

(5) あなたの学校の運動会はどうでしたか。  
○運動会の作文や詩を書いてみましょう。

○女でこの賞を受けた人はだれですか。

(2) 次のことをくわしく調べましよう。

○ 憲法 ○ ノーベル賞

○ 日本の祝日 ○ 湯川博士

○ 新聞の作り方 ○ 文化の種類

○ 手紙の書き方 ○ 学級新聞の作り方

(3) 漢字を使って書きましよう。

○かていしんぶん ○おんがくかい ○と

しよまつり ○へいわとぶんか ○みんし

ゆしゆぎ ○ゆかははくし ○じんるい

(二) 幸福の国の青い鳥

(1) この文を読んで、どういふ点を強く感じましたか。

(2) 次のことについて、調べたり、考えたりしてみましよう。

○ヘレン・ケラー先生は、どこの国の、ど

○そのほかの運動のことも、作文・日記・詩・かへ新聞などに書いてみましょう。

二 平和と文化

(一) おじさんから

(1) 文を読んで次ぎのことに答えましよう。

○あきらさんの作った「家庭新聞」は、どんな組み立てになつていたでしよう。君たちの「学級新聞」とくらべてみましよう。

○新しい憲法はいつ公布されましたか。

○新しい組み立てになつていますが、また、大もとの考えはどういふことですか。

○文化の日は、どういふ祝日ですか。

○湯川博士は、何の研究で、いつノーベル賞を授けると発表されましたか。

○ノーベル賞は、いつごろきめられましたか。いくつの部門に分かれてありますか。

○いふ人ですか。

○どんな考えて、どういふことをしていらつしやる人ですか。

○目も見えず、耳も聞こえない先生に、どうして、世の中のようにすや、人の話がわかるのでしようか。

○東京ろうあ学校の代表の、飲けいのあいさつを読んで、どんな感じがしましたか。

(3) ヘレン・ケラー先生をむかえる歌を、きれいにノートに書き写して、よく読みましよう。曲をつけて歌ってみましよう。

(4) ヘレン・ケラー先生のいい伝記が出ています。この伝記を読んで、先生の苦しい修行時代や、世界平和のためのりっぱな考えなどについて、友だちとよく話しあつてみましょう。

(5) 世界の文化のためにつくした、すぐれた人々の伝記を読みましょう。

### 三 ことばの愛

#### (一) ことばの愛

(1) たろうは、どうさんに、どんな質問をしましたか。また、なぜそういう質問をしたのか考えてみましょう。

(2) 遠い国へ行っていったどうさんは、自分の国のことばについて、どんなことを思い、どんなことを知りましたか。

(3) あなたは、この文を読んで、どんなことを思いましたか。かんそうをノートにまとめてみましょう。

#### (二) 文字の話

(1) アメリカン・インディアンが差出したお願いの文を見て、どんなことを感じましたか。

(6) 仮名はどうしてできましたか。

(7) ローマ字はどうしてできましたか。

### 四 工夫の楽しみ

#### (一) こわれたポータブル

(1) 「こわれたポータブル」の文を読んで、ひろすけが、どのようにしてポータブルをなおしたかをしらべましょう。

(2) ひろすけが、いままでに作ったものには、どんなものがありますか。この研究や製作ぶりについて、どう思いますか。

(3) 〇文やさし絵をしらべ、ポータブルの機械を参考にして、次ぎの問題に答えなさい。

〇ひろすけは、どうしてこわれたポータブルをなおすようになったのですか。

〇このポータブルのこわれたとはどこだったのですか。

文字のできたのはどんな必要からですか。はじめはどんなものが使われていたのでしょうか。

(3) 漢字のできたの主なものは、いく種類ありますか。また、それぞれどんな漢字があるか調べてみましょう。

〇絵がそのまま字になったものにはどんなものがありますか。

〇絵の上へ、さらに列の意味を加えて作った字には、どんなものがありますか。

〇そのほかには、どんな方法がありますか。例をあげてごらんください。

(4) 漢字の組み立ては、どんなふうに分けることができますか。

(5) 字引をひく時、わすれてならないことはどんなことですか。

〇ポータブルをうまくなおした時の、ひろすけの心持はどうだったでしょう。

(4) 次ぎの漢字に読みがなをつけなさい。

写真機 望遠鏡 製作 専門家

書類 報告 分解 金属 金具

(5) みなさんも、自分で工夫したことや研究したことを文に書いてみましょう。

(二) スイスのどけい  
(1) 長いお話です。お話のすじをつかむように読みの練習をしましょう。

(2) 地図や年表を使って、次ぎのことを調べてみましょう。

〇スイスは、ヨーロッパしゅうのどのへんにある国ですか。

〇どんなことで名高い国ですか。

〇このお話のおこりは、今から何年ぐら

いむかしのことですか。

(3) 外国から帰ってきたエアンと村人について、どんなことを感じましたか。

(4) リハルトについて、次ぎのことに答えなさい。

○少年時代のリハルトは、どんな子どもだったと思いますか。

○リハルトは、どけいを作るためにどんな苦心をしましたか。

○ユーラの村には、こがね、白がねの花がまばゆくさいたとありますが、それはなんの結果ですか。

(5) この文を読んだかんそうを書きましよう。

#### 五 冬の生活

(一) スキーの話

(1) スキーの話を読んでわかったことがらを

○その時の先生はだれですか。

(4) これはスキーのれきしについて調べた文です。このほかスキーについていろいろなことを調べてみましょう。

(二) 雪のえい画

(1) 「雪国」のえい画はどんなすじであつたが、みじかくまとめてお話しましよう。

(2) 「雪国」のえい画を見て、この作者はどんなことを感じましたか。

(3) 「雪国」のえい画をもっとおもしろくするためには、どんな場面をとつたらよいといっていますか。それをシナリオに書きかえてみましょう。

(4) 読む人の心をひく文章は、どんなことに注意して書かれたものでしょう。あなたも、いろいろなかんそう文を書いてごらんなさい。

ノートに書きだしなさい。

(2) スタルスキーについて、次ぎの問題に答えなさい。

○どこの人ですか。

○どんなことからスキーに興味を持つようになりましたか。

○はじめて手に入れたスキーはどんなものでしたか。

○そのスキーを、どのように改良しましたか。

(3) 日本に伝わったスキーについて、次ぎの問題に答えなさい。

○それはいつごろのことですか。

○だれから送られてきましたか。

○日本のどこで研究することになりましたか。なぜ、そこにきめたのでしょうか。

#### 六 デンマークの二本の柱

(1) 全文を読みおして、その感そうをノートに書いてください。またそれをみんなて話し合ってください。

(2) この話の中で、一ばん心をうたれたところはどこですか。そこをノートに書きぬいて、発表してください。

(3) この話を、できるだけみじかくまとめてごらんなさい。

(4) (一)「二本の柱」をくわしく読んで、次ぎの問題に答えてください。

○戦に敗れたデンマークを復興させるために、タルカスの考えたことはどんなことでしたか。そしてまず何をしましたか。○グルントウイーの考は、どうでしたか。

愛国的な	126
アメリカ合しゅう国	33
アメリカン・インディアン	52
アルプス山中	79
あれたる	144
息切れ	12
意義深い	130
移植	134
いたわりあう	134
一見	115
一新紀元	120
一首	107
一せいに	16
一定し(て)	55



一敗	118
いっかな	84
いとみかか(た)	118
移民	127
以来	96
うかがう	47
動かばこそ	84
うながす	138
うらざり者	128
うるおい	129
うれうる	144
えい画的手法	105
えい画化する	108
えい久に	32

えいゆう	91
H停留場	36
絵日がさ	19
絵文字	54
えんぎ	15
演だん	46
円板	75
おうえん	15
横断	99
おごそかな	79
おそつ(て)	141
おとろえ(ます)	131
思いめぐらし	124
折紙	34

カーブ	27
かい書	61
階上	38
開たく	117
開発	127
回転	75
改良し(て)	1
外野	10
外務者	102
科学的	31
化学	34
価格	137
かがやかしい	48
限りなく	96

新しく出たおもなことば

かれは、何をしましたか。  
 ○タルガスとグルントウィーを、なぜ、二本の柱と叫びたのでしようか。  
 ○戦に敗れた当時と、今のデンマークはどのようにちがっていますか。それは、だれのカだったのですか。  
 (5) (二)「風と土にいとむをくわしく読んで、次ぎの問題に答えなさい。  
 ○タルガスの考えた計画はどんなことですか。それをどう思いますか。  
 ○どのような考えからこれを思いついたのでしようか。  
 ○それに対して、人々はどいうたいどをとりましたか。  
 (6) (三)「最も悪い日」を読んで、タルガスの苦心した点について話し合ってください。

(7) (四)「最もよい日に」の中にててくるフレデリックはどんな人ですか。かれはどんな発見をしましたか。  
 (8) タルガスのやった植林の利益について、あげてください。  
 (9) デンマークの二本の柱のように、人類のためにつくした人々について調べてみましょう。  
 (10) 次ぎのことばの意味を書きなさい。  
 ○一新紀元 ○複雑 ○不毛のこう地  
 ○防風林 ○む想家 ○予言者

さして	132	81	73	81	9	126	122	133	108	116	113	96	118	15	15	52
細工物	サウンドボックス	さえぎ(られ)	差	こんきよ	コペンハーゲン	試みた	国土改良	国産の	こがね	こえ(た)	号令	合同体そり	合同し(て)			
131	134	119	131	90	66	123	32	39	127	137	143	139	96	123	33	
しゅうかい	女史	準備運動	しゅん間	従順	しゅみ	首府	しゅうやくして	集合し(て)	宗教家	社説	しめ具	使命	四方八方へ	しのぎがたい	130	130
115	57	129	40	41	15	130	130	34	96	109	141	137	85	130	138	
人物	しんにゅう	信念	しん動	真理	進行がかり	信こう	新教徒	進歩	白がね	しるべに	し料	諸国	しよげきつ(て)	証明され(て)	植物学者	

かんがい	120	126	107	26	139	131	42	143	126	30	132	53	134	15	26	48
かんがい	議会	気候風土	記号	期待した	気乗りうす	客土	宮てん	急しや面	旧約聖書	興味	協力	協会	共同事業	教養	キリスト教徒	
127	52	113	48	135	134	127	135	101	119	100	126	127	137	116	116	130
気力	金属	近代産業	銀世界	くいしば(て)	苦境	くじけ(ません)	口調	くっし(ません)	グリーンランド	ん音	芸術家	決意し(て)	血管	決死的な	決勝点	
113	73	112	80	16	136	133	129	127	99	60	120	114	130	126	27	
結論	けわしく	健康	憲法	権利	建ちく用	建設	現代言語学	原則	コイルまき	講演会	幸福	公布され(た)	光線	こう地	こうじ(て)	
133	12	15	32	52	136	126	120	139	65	31	28	32	49	117	127	

名だたる	なじり(ました)	なじみの	なしとげ(られた)	投げやりに	内野	どん底	努力	とりあい(ません)	とぼしい	土木事業	唱えた	ドッジボール	特有の	徒競走	同志
115	136	120	115	124	9	113	47	86	131	116	130	8	132	16	114
農民	農業王国	ノーベル物理学賞	年代	ねつれつな	根強く	熱戦ぶり	熱情	音色	ぬま地	人魚	入用な	日夜	にぎわい(ました)	にいがた県	難事中の
116	120	33	60	130	130	23	130	40	124	53	90	124	20	103	132
ヒース地帯	ハンドバック	半世紀	反しやる	バルチック海	はなばなしく	バトン	発くつし(て)	歯車	ばく発し(た)	白金	はかどら(せた)	売店	敗戦	はい水	ののしられ(た)
140	25	33	67	137	31	27	126	72	27	96	117	20	115	127	128
ふきすきぶ	武器	不可能	フィンランド	ピンク色	貧苦	悲鳴	びみょうな	非難	日どけい	ひていする	ひた向きに	美術展らん会	日ざし	ひけつ	ひかえ席
124	32	132	99	36	144	75	40	127	88	128	6	31	13	93	15

専門家	前文	前庭	先祖	線画	世界無比	勢力	せいふく	生存	スタートライン	水力電気	水じゆん	水位	スイス	人口	人類社会
66	32	15	130	55	137	123	125	125	16	112	34	132	79	120	144
立ち往生	他国	たげき	大名	大接戦	大業	台地	大詩人	第一人者	尊敬	素質	組織的に	祖国	続々と	総立ち	草書
108	81	113	131	271	130	79	116	120	91	138	133	115	23	23	61
つくなわれ(て)	通訳	調節	調子づい(て)	ちようこく	注目	ちみつ	地勢	千島列島	地質	ちく産品	ちかつ(た)	たんねんに	たん検家	保つ(て)	タフー
142	47	125	68	120	53	81	126	122	126	121	144	107	99	125	53
堂々と	童話作家	ドイツ	デンマーク	電ちく	点じる	天才	テン	鉄こう	てつ学者	手製	定こく	つのつ(て)	つづらおり	つつましい	つちかう
41	120	118	112	68	48	55	53	112	120	92	39	23	79	107	143



良 <small>りょう</small> (91)	報 <small>ほう</small> (69)	権 <small>けん</small> (52)	講 <small>こう</small> (36)	敵 <small>てき</small> (27)	齒 <small>は</small> (16)	相 <small>そう</small> (5)
造 <small>つく</small> つて (95)	告 <small>こく</small> (69)	印 <small>いん</small> (53)	堂 <small>どう</small> (36)	要 <small>よう</small> (30)	軍 <small>ぐん</small> (18)	談 <small>だん</small> (5)
限 <small>かぎ</small> り (96)	解 <small>かい</small> (71)	漢 <small>かん</small> (54)	留 <small>りゅう</small> (30)	布 <small>ふ</small> (32)	給 <small>きゅう</small> (20)	守 <small>まも</small> り (5)
等 <small>とう</small> (96)	付 <small>つけ</small> け (71)	仮 <small>か</small> (54)	詞 <small>し</small> (42)	憲 <small>けん</small> (32)	副 <small>ふく</small> (20)	差 <small>さ</small> (9)
達 <small>たつ</small> (99)	属 <small>ぞく</small> (73)	定 <small>てい</small> (55)	届 <small>とど</small> き (47)	武 <small>ぶ</small> (32)	奮 <small>ふん</small> (20)	得 <small>とく</small> (10)
央 <small>おう</small> (99)	久 <small>ひさ</small> しい (81)	圧 <small>あつ</small> (65)	努 <small>ど</small> (47)	士 <small>し</small> (33)	総 <small>そう</small> (23)	席 <small>せき</small> (14)
陰 <small>けん</small> (99)	他 <small>た</small> (86)	鏡 <small>きやう</small> (65)	訳 <small>やく</small> (47)	授 <small>さず</small> ける (33)	完 <small>かん</small> (26)	歡 <small>かん</small> (15)
独 <small>どく</small> (102)	敬 <small>けい</small> (91)	専 <small>せん</small> (66)	情 <small>じやう</small> (48)	紀 <small>き</small> (33)	取 <small>とり</small> (27)	健 <small>けん</small> (15)
各 <small>かく</small> (102)	改 <small>かい</small> (91)	徳 <small>とく</small> (69)	浴 <small>あ</small> びて (49)	史 <small>し</small> (35)	味 <small>み</small> (27)	康 <small>こう</small> (15)

新しく出た漢字

放しや線	変圧器	経る	ペーコン	平方キロ	平きん台	ふんだんに	ふん水	分解し(て)	フラッシュ	フラン	部門	不毛	ふち	副食物	複雑
66	65	54	121	124	6	107	18	71	49	75	34	114	114	20	123
満場	まま子あつかい	学ば(ざるべし)	まことしやかな	本来の	本場	本意	北氷洋	牧草	報告	ポータブル	防風林	ほう建的な	ほう台	望遠鏡	貿易総額
39	123	119	91	144	92	144	99	142	69	64	114	131	119	65	120
やわらげ(られ)	やせ(た)	門がまえ	モミ	もう人たち	面積	めぐまれ(て)	メガホン	む想家	無人島	むぎむぎ	無形の	無学	民主主義	みつ林	自から
141	114	57	125	39	124	112	74	125	99	93	143	144	32	140	118
ワンピース	わけても	ろうあ学校	レコード音楽	歴史	るつぼ	理論	理解され	利益	よみがえった	予言者めいた	欲心	要点	要具	有志	湯川りゆうし
36	30	46	14	113	26	33	115	138	143	129	134	30	97	23	33

益 <small>えき</small> (138)	可 <small>か</small> (132)	節 <small>せつ</small> (125)	額 <small>がく</small> (120)	敗 <small>はい</small> (113)	式 <small>しき</small> (102)
素 <small>そ</small> (138)	能 <small>のう</small> (132)	協 <small>きょう</small> 126	肉 <small>にく</small> 121	宗 <small>しゅう</small> 115	省 <small>しょう</small> 103
則 <small>そく</small> (139)	退 <small>たい</small> (132)	帶 <small>たい</small> (126)	適 <small>てき</small> (122)	祖 <small>そ</small> (115)	序 <small>じょ</small> (104)
救 <small>すく</small> れ (140)	織 <small>しき</small> (133)	移 <small>い</small> (127)	府 <small>ふ</small> (122)	難 <small>なん</small> (116)	確 <small>たし</small> かに (106)
牧 <small>ぼく</small> (142)	欲 <small>よく</small> 134	非 <small>ひ</small> 127	資 <small>し</small> 123	旧 <small>きゅう</small> 119	往 <small>おう</small> 108
建 <small>けん</small> (143)	程 <small>てい</small> (135)	政 <small>せい</small> (127)	複 <small>ふく</small> (123)	約 <small>やく</small> (119)	栄 <small>さか</small> える (112)
述 <small>の</small> べて (144)	比 <small>ひ</small> (137)	証 <small>しょう</small> (130)	雜 <small>ざつ</small> (123)	聖 <small>せい</small> (119)	欠 <small>か</small> けて (112)
	価 <small>か</small> (137)	必 <small>かなら</small> ず (131)	生 <small>ぞん</small> 存 (125)	賀 <small>がう</small> (120)	豊 <small>ゆた</small> かな (113)
	諸 <small>しよ</small> (137)	在 <small>ざい</small> (131)	保 <small>たも</small> って (125)	易 <small>えき</small> (120)	歴 <small>れき</small> (113)

文を書いた人

- 二(一) 幸福の国の青い鳥……石森延男
- 三(一) ことばの愛……島崎藤村
- (二) 文字の話……大西雅雄
- 四(一) こわれたポータブル……岡西義雄
- 五(一) 雪のえい画……石森延男

このほかの文は編集部とじどうものの

絵をかいた人

- 高橋庸男
- 西村保史郎
- 三芳愷吉
- 三輪孝

国語の本 十 (小学校第五学年後期用)

昭和二十五年三月二十一日印刷  
昭和二十五年三月二十五日発行  
(昭和二十年 月 日 文部省検定済)

Approved by Ministry of Education  
(Date Mar. 21, 1950)

著作者 西原慶一 泉 節二  
山下正雄 飛田多喜雄  
小山玄夫 齋田 喬

定価 円 銭

発行者 東京都北区稻付町一丁目二〇八番地  
二葉株式会社  
代表者 大野 治 輔

印刷者 東京都北区稻付町一丁目二〇八番地  
二葉株式会社  
代表者 大野 治 輔

発行所 東京都北区稻付町一丁目二〇八番地  
二葉株式会社



なまえ

広島大学図書

広島大学図書

0130449929



二葉株式会社

庫  
0  
29